

流布本『清少納言集』注釈稿 三

金井利浩

〈キーワード〉 清少納言集 流布本 注釈 構造 連想

本稿は、前稿「流布本『清少納言集』注釈稿 二」（本誌第三〇号、二〇一七年三月発行）の続稿である。

前稿でも述べたとおり、村井順や萩谷朴らによって示された『清少納言集』は「流布本」の読みを、或いは嗣音し、或いは見直してみたいとの念いに基づいてする、試行であり私考である。

今回もまた、失当の多からんことを恐れている。ご斧正を乞う次第である。

〔凡例〕

一、【本文】は、笠間影印叢刊26『清少納言集』に拠り、改行の様態はそのままに、仮名・漢字は現行のそれらをもって掲出した。

なお、和歌に通し番号を付した。

二、【釈文】は、【語釈】を経て【通釈】に至る根拠としての表記をもつてする本文であると同時に、【語釈】と【通釈】とを経て還り戻る原点としての本文である。すなわち、【本文】の仮名に漢字を宛て、漢字を仮名にひらき、仮名に濁点を加えることがあるほか、詞書には句読を加点することもある。

三、【語釈】は、【通釈】の根拠たりうるところを示した。なお、●印を冠して掲げる見出し語句は、【本文】の表記による。

四、【通釈】は、【釈文】の意味するところを現代日本語表現をもって示した。なお、和歌に対応するところには、和歌と同じ通し番号を付した。

五、【補説】は、【本文】について、【釈文】【語釈】【通釈】の範囲には余るところに言及した。
六、学恩を忝うした、また折々に引く諸家の御著は、左の略称ないし著者姓氏をもつて示した。

【講座】

橋本不美男「清少納言集」(『枕草子講座第一巻』所収)

有精堂 一九七五

【選書】

村井 順 『清少納言』(笠間選書)

笠間書院 一九七七

【全歌集】

萩谷 朴 『清少納言全歌集 解釈と評論』

笠間書院 一九八六

【歌人抄】

清水 好子 『王朝女流歌人抄』

新潮社 一九九二

【大系】

佐藤 雅代 『清少納言集』(和歌文学大系20のうち)

明治書院 二〇〇〇

【歌人選】

坏 美奈子 『清少納言』(コレクション日本歌人選207)

笠間書院 二〇一一

七、【語釈】ならびに【補説】の項においてする引用のうち、和歌については原則として新編国歌大観に従ったが、八代集は新日本古典文学大系に、万葉集は新編日本古典文学全集に拠った。ただし、いずれの場合も、読解の便をかんがえて表記を改めたところがある。散文作品については、『枕草子』は本文・章段数とも新潮日本古典集成に従い、他はそのつど新日本古典文学大系や新編日本古典文学全集など通行の本文を用いた。

八、【語釈】ならびに【補説】の項における記述について補注を要する場合には、それぞれの歌ごとに、当該の【補説】の後に、【注】を置いた。

【本文】

はるかつらのえたのもたるにさして

16 花もみなしけき木すゑに成にけりなとか我身のなるかたもなき
【釈文】

春、桂の枝の茂りたるに挿して、

花もみな繁き梢になりにけりなどかわがみのなるかたもなき

【語釈】

●かつら―樹木の一名称。桂。カツラ科の落葉高木。春の新緑、秋の黄葉ともに美しい。葉は長さ3〜8センチメートルの丸いハート型。山地に自生し、早春、葉に先立って紅色の小さな花をつける。ちなみに、新緑の枝は、賀茂神社の葵祭で人びとが身を飾るのに用いる。●もたる―一つの可能性としては、「持ちあり」もしくは「持てあり」から転じた「持たり」の連体形、との理解があるが、おそらく文意通じまい。いまは試案として、原姿「しげりたる」の「しげり」に、ある書写段階で「茂」の漢字一字が当てられて「茂たる」となり、それが次の段階でふたたび翻って仮名「も」へと開かれて至ったのが現本文「もたる」であると見て、「茂りたる」を【釈文】本文に立てておくことにする。なお、かくて生成する「桂の枝の茂りたる」の「の」は、同格の用法である。直訳すれば、「桂の枝で、葉のたくさん広がっている枝」となる。●さして―「さし」は「さす」の連用形。「挿す」と漢字を当てるのが一般だが、ここでは「結ぶ」の意である。なお、この「さして」の後には、「おこせたる」を補い得る。先に、13番歌の【語釈】の項において、本集の詞書内の、ことに詠歌直前の（動詞の連用形＋「て」）は、その主体を清女と見るべき旨、陳べたけれども、ここは状況的にそれに当嵌まらない。桂を文付枝に文を送り届けてきたのは、男の行為以外ではないからである。●花もみなしけき木す系に成にけり―「花もみな」を初句に始発する歌うたは、「花もみな散りぬる宿は行く春の古里とこそなりぬべらなれ」（『貫之集』第一・八。拾遺・卷第一・春・七七）、「花もみな散りなむのちは我が宿になにつけてか人を待つべき」（後拾遺・卷第一・春上・二七〇。中務卿具平親王）、「花もみな夜ふくる風に散りぬらむなにをか明日のなくさめにせむ」（『和泉式部集』五九三）などと、およそ「散る」とが類型化されている。当歌は、それをあたかも自明であるとするかのようにして詠わず、むしろ散ったあとの時季における枝葉の新緑を前景化して、下句で詠まれることになる人為との対比の文脈を領導している。●なとか我身のなるかたもなき―下句を「なとか我身の」と起こす歌うたは、「うき世には門させりとも見えなくになどかわが身の出でがてにする」（古今・卷第十八・雑歌下・九六四／平貞文）、「降る雪や花と咲きてはたのめけむなかわが身のなりがてにする」（『貫之集』第九・七七八）というように、歌中主体がおのが身の不足・不運をめぐって自省・自問する心姿を表明・表出する点において同相であり、当歌もその例外ではない。なお、その主体はいずれも男である。さて、「我身の」の「身」には「実」が掛かり、「なる」は、「成る」と「生る」とを掛ける。「かた」は、ここでは、上の掛詞に即して解けば、時機・時季、の意である。

【通釈】

春、桂の葉がたくさん広がった枝に結んで（届けてよこした歌）、

16 桂は、花はすっかり散り、今や梢に葉の広がるときを迎えていることよ。なのに、どうして私には、木であればやがて実が生るように、身の上の恋が成就するときがないのだろうか。

【補説】

前歌で登場した、呉竹に結んで文を届けてきた男からの連想で、桂の枝を以て類に及んだ男からの歌を、ここに置いたのもあろうか。その男とは、いったい誰であろうか。

それにしても、【語釈】の項に引いた平中歌といい貫之歌といい、類型を襲っているとしても、いや、襲っているからこそまず、男はなぜかくも同じなのであろうか、という一点が気になってくる。時代を経ても、また――。
かくて、当歌を詠んだ男の正体が、いよいよ知りたくなるのである。

【本文】

返し

17 契てししけき梢の程もなくうらみときにはいか、なるらむ

【釈文】

返し

契りてししけきこず糸のほどもなくうらみどきにはいかがなるらむ

【語釈】

●契てし―「契」は今日的な送りがないが、これで「契る」の連用形。それに完了の助動詞「つ」の連用形と過去の助動詞「き」の連体形とが下接。全体で、あとの「程」を修飾する。「契る」は、固く約束する意。特に、男女間で行く末の変わらない愛情を約束すること。既に3番歌の詞書でも見たとおり、しばしば「うらむ」と切り結ぶ文脈を形成する。約束をし、それが反古になり、またはそれを反古にし、恨む、または恨まれる、という男女間の展開に与る。当歌もその一つであり、下句の始発部に、見られるとおり「うらみ」の語が待つ。なお、「契てし」を初句に据える歌に、「契りてしこよひすぐせる我ならでなど消えかへるけさの淡雪」(『一条撰政御集』七三)、「ちぎりてしことの違ふぞたのもしきつらきもかくや変るとおもへば」(『実方集』二九五)。ち

なみに、契つたのは、前者では詠み手自身、後者では對手、である。●しげき梢の程もなく―贈歌と同じ「しげき梢」という表現を同じ位置に据えて切り返す。しかし、というよりも、ゆえにこそ、意味はずらされていよう。すなわち、たとえば「わが恋は深山がくれの草なれやしげさまされど知る人のなき」（古今・巻第十二・恋歌二・五六〇／小野良樹）や「津の国のなにはの葦のめもはるにしげきわが恋ひと知るらめや」（同前・六〇四／貫之）といった詠に明らかかなように、「しげし」にはいったい草木の茂る意と恋情の激しさをいし絶え間の無さの意とが掛かることに鑑み、恋情の激しきをもって、足しげく頻繁に、の内意を宿していよう。その意味では、「梢」を「こずゑ」と仮名に開き、「来ん末」の意を掛けると見て、足しげき来訪を重ねた末・果て、といった理解も成り立つかに思しいが、「来ん末」にいささかの難があらうか。ともあれ、ここではしかし、「∴の程もなく」と承けられて、∴のような折もなく、∴のような時分を持つこともなく、と歌意は反転してゆくことになる。●うらみときには―「うらみとき」はやや熟さぬ表現か。管見の限りでは、他に例を見ない。いずれにしろ、「うらみ」に、「恨み」と「実」とが掛かることは動くまい。実の生る時と、恨みがつりの恨み言をぶつけたくなる時と。●いか、なるらん―「いか、」は、副詞「いかに」に疑問の意の係助詞「か」が付いた「いかにか」が「いかんが」と撥音便化し、「ん」が表記されなかつたところから成った語。ここでは、下の「らむ」と呼応して、「どうして∴だらうか」との意味合いを形成する。「なる」については、贈歌のそれが、「成る」と「生る」とを掛けていたのに対し、当歌では、∴に至る、到達するの意の「なる」と、実ができる意の「生る」とを掛ける。ある意味での、これも歌の贈答における答歌（返歌）のパターンである。

【通釈】

返歌

17 桂は、いつも決まって梢に葉を繁らせる折を経ればこそ、実の生る時を迎えるのでしよう。それに引き換えあなたは、約束をした、足繁く訪れ来てくれるという時期もなしに、どうして恨みをつのらせる今というときをお迎えになれるのでしょうか。

【補説】

前歌と当歌、異本では歌序が逆である。すなわち本流布本における贈答歌としての理解は異本には望み得ず、また、当歌を単独で見ても、初句を「花ちりて」とする異本によればさすがに歌意は通りやすからうけれども、内実はいかにも直線的で、その平板さは如何ともしがたかるう。殊に、「しげきこずゑ」の持つ表現の厚み、放つ意味の重層性を閉脚してしまう点、異本の決定的な

弱みであろう。

翻って当歌は、贈歌の「しげき木ずゑ」、「み」、「なる」をしたたかに擬もどいて切り返した、清女の面目躍如ともいうべき答歌と称してよいだろう。

【本文】

のりかたくまのにまうつとてそのほとにはきなむ

といひしかかへりたるとはきけとをとも

せてきたりとはき、たりやとあるに

18 いっしかと松の梢ははるかにて空に嵐の風をこそまで

【釈文】

則長、熊野に詣つとて、「そのほどには来なむ」

と言ひしが、帰りたるとは聞けど、音も

せで、「来たりとは聞きたりや」とあるに、

いっしかとまつのごずゑははるかにてそらにあらしの風をこそ待て

【語釈】

●のりかた―清女の身边・周辺に「のりかた」を比定し得る人物は見出しがたい。いま、異本注記「のりなか」に従う。「のりなか」は、陸奥守橘則光を父とする、清女の息男、則長。天元五（九八二年）長元七（一〇三四）年。平安時代中期の歌人。正五位下、越中守。『後拾遺和歌集』に三首、『新統古今和歌集』に一首、それぞれ入集。能因法師の姉妹を妻としたほか、『後拾遺和歌集』からは相模とも関係があったらしいことが知られる（五六〇、九五四番歌）。また、『枕草子』には、則長の恋人から相談を受けた清女が、則長宛てに歌を詠んでやる逸話が見える（第二九五段）。●くまのにまうつ―「くまの」は熊野。紀伊国の地名。現在の和歌山県から三重県にかけての熊野川流域の山岳地帯にある宗教的聖地。「まうつ」るのは熊野権現、すなわち熊野坐神社（本宮）・熊野速玉神社（新宮）・熊野那智神社（那智）の三社である。古くから全国的信仰を集め、熊野詣では院政時代から貴族や庶民の

あいだで流行した。●そのほとはきなむ―「そのほどには来なむ」。則長が言い置いていった言葉である。「そのほど」は、実際には具体的に「○○日頃には」と発語されていたことを示唆する表現。「来なむ」の「な」は強意、「む」は意志をそれぞれ表す助動詞。●いひしか―「か」は逆接の接続助詞「が」。●をともせで―音もせで。則長の実際の訪れはなかったというのである。●きたりとはき、たりや―「きたり」は「かえりきたり」と同意。「来たりとは聞きたりや」。後を「とあるに」と承けていることから推せば、文による訊いかけであることは動くまいが、その訊いの主は則長本人か、それとも則長の帰京を鶴首する清女の心の内を思い慮った周囲の誰かか。いまは、新たな主語を立ち上げてはいない詞書本文の現況に鑑み、前者と観ておく。●いつしかと松の梢ははるかにて―「いつしか」は、ここでは、次の「松」＝「待つ」に徴して、これから起こることに対して、その時を待ち望む意を表す用法である。いつか早く。いつ…か。いつになつたら…か。「松の梢」の「松」には「待つ」が掛かる。たとえば、「いつしかと待乳の山の桜花待ちてもよそに聞くがかなしき」(後撰・卷第十八・雑四・二二五／よみ人しらず)などと同相。「梢」には「子」が響く。あるいは、「来ず」が響く、と見るべきか。「はるかにて」は形容動詞「はるかなり」の連用形に接続助詞の「て」。「はるかなり」は、届きようもなくかけ離れているさまを表す。空間的にも時間的にも用いるが、ここでは前者。同じ腰の句にこれを詠んだものに、「あはれをもこたへしきみははるかにて心づくしの秋ぞわびしき」(脩宮女御集・二二二)がある。●空に風の風をこそまで―「風」は、『枕草子』に「風はあらし。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる雨風」(二八七段)、「風の風」も、たとえば「あふさかの風の風はさむけれど行くへしらねば侘びつつぞ寝る」(古今・卷第十八・雑歌下・九八八／よみ人しらず)、「人心あらしの風のさむければこのめも見えず枝ぞしほる」(後撰・卷第十八・雑四・二二八／伊勢)、「うき世にはあらしの風をしるべにてこし山水に袖はぬらしつ」(和泉式部集・六四二)などとあって、いずれも、いわゆる暴風ではない。「こそまで」は、言うまでもなく、係助詞「こそ」に、「まで」は「待つ」の已然形で、係り結びである。「待つ」主体は、「松の梢」である。松の梢は、上空に風の風が吹くのを、離れたところから今か今かと待ち望んでいる、というのがこの歌の第一義である。ちなみに、松と嵐なし松の梢と風といった取合せは、勅撰集では『古今和歌集』・『後撰和歌集』・『後拾遺和歌集』の各集に皆無、かろうじて『拾遺和歌集』に、「冬されば嵐の声もたかさこの松につけてぞ聞くべかりける」(巻第四・冬・二二六／能宣)、「尾上なる松の梢は打ちなびき浪の声にぞ風も吹きける」(巻第八・雑上・四五三／忠見)の二首を認める。松なし松の梢が風を待つのは、両者が結んで松籟・松韻を生むがゆえである。さて、一方で、「嵐」には「あらし」が掛かる、という。歌意からすれば、むしろ「あらし」、すなわち「あるらし」

の撥音便形「あんらし」の「ん」の表記されなかったものと見ておきたい思いに駆られるが、他に確例を見出し得ない。かくて、「あらじ」の文脈形成には、「空に」が鍵となつてこよう。卑見によれば、「空に」には「そらに」が掛かる。「そらなり」の連用形である。「そらなり」は、根拠がない、偽りであるの意を表す。竟に「あらじ」と連繋しての「そらにあらじ」とは、事実無根などではありますまい（確かにお帰りのようですよ）、との釈義である。その際、「風」にもまた、風聞の意が掛かる。総じて、一首の深義は、わが子の確かな帰京・帰館を待ちわびる母心のかたどりにあつたと観られるのである。なお【補説】を参照されたい。

【通釈】

則長が、熊野権現に詣でるといふことで、「いついつにはきつと戻ってきます」と言っていたのだけれど、帰ってきたとは耳にするものの、訪れもなく、「戻ったとお聞きになつたのですか」と言つてよこしたので（詠んだ歌）、

18 いったいいつになつたらと松の梢は遠く離れていてもなお、松籟をもたらず嵐の風が上空に吹くのを待つものようですが、とにかく早くにと帰りを待つそなたは遠くにいて、わたしは、「嘘ではないですよ、確かに帰っていますよ」といふ風の便りをこそ待ちわびているのです。

【補説】

詞書の伝える状況は、必ずしも分明ではない。【語釈】の項でも少しく触れたとおり、詞書掉尾の主体の確定をめぐつては浮動的要素を抱えているかにも思しいが、則長からの来信、それへの応答歌という構図でなければ、一首の存立の意義はそもそも保たれてはいなかつたと言ふべきであらう。

さてまた、この一首には、歌意の貫通において溜飲の下がりきらぬところがあつたかに思しい。すなわち、「嵐」に「あらじ」が掛かることを説くに及んで示された、「則長がないことを暗示する」（『大系』）との理解は、「待つ」に収斂してゆくはずの一首の脈絡に照らして、いささか不審ではなかつたか。あるいはまた、「空に」を「あてもなく」（『大系』）、「あてにせず」（『歌人選』）と解して、「空頼みだが、なかなか逢えない息子を、気長に待つ様子」（『歌人選』）と説かれてきたことも如何であつたらうか。詞書の行間に張り詰めて存する親心のありようや、「いつしか」と詠み起こし、「をこそ待て」と詠い収めて屹立する一首の歌柄に徴して、やはりいささか打ち合わぬ憾みを遺してきたように思われるのである。

みぎの【語釈】ならびに【通釈】において問うた私見はもとより試見に過ぎないが、風を待つ松の梢、子を待つ母という表・裏

それぞれの歌意は、とりあえず通し得たものと考えている。

【本文】

おもひいつやこ、には十廿となむ思ひいつる
とあるに

19 その名にぞ思ひけるこそくやしけれかすしるはかりくやしき物を

【釈文】

「思ひ出づや。ここには、十、^(こを)二十^(はた)となむ思ひ出づる」
とあるに、

その名にぞ思ひけるこそくやしけれ数知るばかりくやしきものを

【語釈】

●おもひいつや―「おもひいつ」は、胸の底にあることを表面に浮き出させる意。思い起こす。念頭に浮かべる。「や」は疑問の意を表す終助詞だが、ここは、事態を相手につきつけ問い糾す、いわゆる質問の用法である。私を思い浮かべること、ありますか。私のこと、思い出してくれてますよね。●こ、―ゆらい場所をさす指示代名詞だったが、直接その人をささず、場所によって示す婉曲表現として人称代名詞に、やがて転用された。そこにいる誰をさすかによって、一・二・三人称のいずれにも用いられる。ここは、かく清女に言つてよこした男の一人称である。●十廿となむ思ひいつる―「二十」は、男が清女を「思ひいつる」回数である。「なむ」は強調の係助詞。これに応じて、つづく「思ひいつる」は「思ひいつ」の連体形。係り結びである。男が、私のほうは十回も二十回も思い起こしているよ、と吹聴してきたのである。●とあるに―前歌の詞書と同じ掉尾である。●その名にぞ思ひけるこそくやしけれ―まず、何よりも、「…そ…こそ…」という係助詞の重畳する構えが目を奪う。「くやしけれ」に収斂する清女の胸中に、すべからく思いを致すべきであろう。さて、「その名にそ」の「名」は、噂。評判。名声。清女の時代よりはだいで下るが、『西行法師家集』に「くちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄かたみにぞみる」(雑・四五五)。ただし、注釈史は、名前、呼び名の義を指示し、解釈を顧慮してきたこと、知られるとおりだが、如何。【補説】に拠りたい。「に」は、下に「思ふ」

「知る」「見る」などの感覚動詞を伴うばあい、その知覚の内容を示す。…である。…として。…のままに。…のように。「ける」は、むろん、「けり」の連体形。「けり」は知られるとおり、「き(来) + あり」である。現在の時点で認識を新たにしたいという意を示す。「くやしけれ」は、上の「こそ」を承けて、「くやし」の已然形。「くやし」は、ゆらい動詞「くゆ(悔ゆ)」の形容詞形。過去の自分の行動の結果を失敗だったと思い、そうしなければよかったと嘆く気持ちをいう。後悔される。残念だ。●かすしるはかりくやしき物を―「かす」は、数、「しる」は、知る。「かす」の詠み入れは、当然、相手の男が誇らしげに「十」「廿」と言い放ってきたのを承けてのことであろう。そも、男女間にあつては、恋は計量しないことをもって是とし、数量化できないことをもって佳しとした。ことに『後撰和歌集』には「月日をも数へけるかな君恋ふる数をも知らぬ我が身なになり」(巻第九・恋一・五四三/よみ人しらず)、「雨やまぬ軒の玉水数知らず恋しきことのまさるころかな」(同右・五七八/兼盛)のほか、「わが恋の数にしとらば白妙の浜の真砂も尽きぬべらなり」(巻第十・恋二・六四三/在原棟梁)、「わが恋の数をかぞへば天の原くもりふたがり降る雨のごと」(巻第十二・恋四・七九五/敏行朝臣)、「数知らぬ思ひは君にあるものを置き所なき心地こそすれ」(巻第十四・恋六・一〇五二/よみ人しらず)などと多くを見る。かかる発想や表現のいわば対極にある「数知る」は、よって、負の意味で、数をかぞえることができてしまうことを指示しよう。場合によっては、数がわかるくらい少ない、数がかぞえられるくらい価値が小さい、の意となるはずだが、ここは、「十」「廿」という数量化もさりながら、それが決して少なくはないと認識しているかに思しい、「数知らぬ」思いを持たぬ男への、揶揄を込めての「数知る」か。「はかり」は、副助詞「ばかり」。動作や作用の程度を表す。…ほど。…くらい。「数ふれば年の残りもなかりけり老いぬるばかり悲しきはなし」(新古今・巻第六・冬歌・七〇二/和泉式部)。さて、結句でふたたび「くやしきものを」と、先の「ぞ」と「こそ」の畳積に加え、「くやし」の語が用いられることにも留意したい。おのが今日までの愚かさを悔いても悔やみきれぬ思いに、清女の心は領されているのである。「ものを」は詠嘆の終助詞。しばしば、逆接の気持ちを含んだ詠嘆・感動の気持ちを表す、と説かれるが、和歌ではむしろ、「ながむればわびしきものを山の端に入り日とくさはやも暮れなん」(貫之集』第五・六六三)、「松山につらきながらも浪こさむことはさすがに悲しきものを」(後撰・巻第十一・恋三・七五五/贈太政大臣)といったように、逆接を含まずに、嘆きの極みを象るように用いられるばあいが多し。

【通釈】

「思い起こしてくれているでしょうか。私のほうでは、十回、二十回と思い浮かべていますよ。」と言ってよこしたので(詠

んだ歌)、

19 世間の評判のままにあなたを「数知らぬ」思いの持ち主と慕わしく思いつづけてきたことが、あまりに悔しくてなりません。十回や二十回などという数を「知る」ことほど悔しいものではありません。

【補説】

異本の初句が「その名見て」に作られているゆえもあつてか、注釈史は「名」を名前の意と解き、そこに、かの実方を比定することもあつた。なるほど実方であれば、『全歌集』の説く「実法」を持ち出すまでもなく、あなたのことを「実方」というその名前のままに実のある方と思つていたなんて、ほんとうに悔やまれます、と解いて、歌意そのものは十分に充足させ得よう。

しかるに、「名前」説の唯一最大の難点は、一般論として、「思ふ」ことの因由に名前を据えておいて、その据えたことをさまで悔いるものであろうか、別言すれば、そのような女性はそのような悔い方をするものであろうか、という疑義の残るうことである。あえて、右では評判・名声の意において解いてみた所以である。

尤も、一首が戯れの位相下に詠まれたのであれば、もとより話はまったく別である。そのばあいには、むしろ「名前」と見るほうが優るであろうし、「十」も「廿」も、戯れ言として、別の色味を帯びて躍動することになろう。すべからく、後考に俟ちたい。

それにしても、連続を庶幾する女と回数を誇らんとする男とのあいだには、決定的な差異が存していよう。戯れ歌といふのであれば、そこを徹底的に愉しんでいよう。女は日常を待ち続けていればこそ相手にも連続を願い、男は日常の中に相手を思う時間を意識すればこそその回数を相手に向けて誇りたくなるのもあろう。

かくて、女が願い、男が誇るのとは、ともに一所懸命だからである。戯れ歌本位なのであれば、この男女はそのことを知悉して、まさに戯れているのである。

【本文】

ほたいといふ所にせ経きくとて人のもとより

とてかへりねとおほつかなきにとあるに

20 もとめてもかゝるはちすの露を置いて浮世に又はなにかかへらむ

【釈文】

菩提といふ所に説経聞くとて、人のもとより、

「とく帰りね」と、「おほつかなきに」とあるに、

求めてもかかる蓮の露をおきて憂き世にまたはなにか帰らむ

【語釈】

●ほたいといふ所―「ほたい」は、菩提。以下、同話が『枕草子』第三十一段ならびに『千載和歌集』卷第十九・釈教歌・一二〇六の詞書に載るが、いずれも「所」を「寺」に作る。「菩提」と号する寺は、醍醐・東山・花園あたりに存したようだが（『全歌集』など）、清女が参詣していた可能性としては、距離的な観点から、東山の阿弥陀峰南麓あみだがみねのそれが高いか。ただし、「ほたいといふ所」という表現を、一般名詞としての菩提所ないし菩提寺の意に解くとすれば、比定すべき寺は右の限りではないことなるう。●せ経―説経。経文の意味や仏教の教えを平易に説いて聞かせ、民衆を教え導くこと。説法、唱導、談義とも。●とて―文脈的には、この後に、「あるに」との表現なり、詣でていたところ、との意味合いなりを補い読むべきか。●人のもとより―「人」が誰を指示するか、にわかには定めがたい。本集流布本の表現の論理にしたがえば、夫ないし男か。●とてかへりねと―「とて」は、「て」（字母「天」を「く」（字母「久」）からの転訛と見て、【釈文】では「とく」とした。形容詞「と（疾）し」の連用形である。また、「ね」は、完了の助動詞「ぬ」の命令形である。「かへりね」の後の「と」は、つづく「おほつかなきに」の後の「と」とともに、〈「…」と、「…」と〉型の同種格並立の構文を形成する「と」である。●おほつかなきに―「おほつかなき」は、形容詞「おほつかなし」の連体形「おほつかなき」。「おほつかなし」は、まず、つかみどころがなく不確かなさま、また、眼前にない対象について、気にかかっているのだが、様子や動向がよくわからないことを表す。そこから、それを確かにしたいと思う気持ちに転じ、気がかりな相手や愛情を抱いている相手などについて、会いたい、言葉を交わしたい、とするばあいにも使われた。「暁に帰らむ人は、…格子おし上げ、妻戸あるところはやがて、もろとも率ていきて、昼のほどのおほつかなからむことなども、いひ出でにすべり出でなむは、見送られて、なごりもをかしかりなむ、…」〔『枕草子』第六十段〕。「に」は、理由を表す接続助詞。●とあるに―前々歌・前歌、そして当歌と、詞書掉尾は三首連続して同工である。●もとめても―「もとめ」は「もとむ」の連用形。それにつ

づく「ても」が逆接の仮定条件を形成する。「もとむ」は、会いたい人や欲しい物、あるいは望ましい状況などを手に入れようとする事。ここは、「人」が、会いたいから、早く帰ってきてほしい、と言ってよこしたことを承けて、いくらそのように望んでも、と切り返すかたちで詠い起こしているのである。●かゝるはちすの露を置いて―「はちす」は、蓮。「蓮の露」で、極楽に住することをいうが、ここは、「せ経きく」べく「ほたいといふ所」に参会した、その仏縁を指す。「かゝる」は、斯かる。よって、「かゝるはちすの露」とは、清女が説教の場に現に参じている状況の謂いである。「置いて」の「置」は、「置く」Ⅱ「措く」の連用形。意は、物に位置を与える、手から離してそのままにする、と二つあるが、ここは後者である。説経を聴いている現況を手放すとは、要するに、説経を聴くのを途中でやめる、ということである。なお、「かゝる」は「掛かる」の意をも、また「置」は、右に示した二つのうち前者の意をも、それぞれ持ち得る語だが、その所以によって、「露」の縁語である、と認定し得る。●浮世に―「浮世」は、後世の表記。憂き世。悲しみや苦しみに満ちたこの世。恋の文脈においては、悩み多い男女の仲。実体的には、「人」の許、である。●又は―「は」は強調。二度とは。再びなど。用例としては、時代は下るが、「さかづきのかげをだに見ずかくばかり憂き世にまたは出でじと思へば」〔久安百首〕八九／実清)など。●なにかかへらむ―「なにか」は、ここでは反語で、どうして…か、いや…ない。

【通釈】

菩提という寺に説経を聴こうとして詣でていたところ、あの人から、「早く帰って」とか、「待ち遠しいから」とか言つてよこしたので(詠んだ歌)、

20 あなたがいくら望んだって、こんなありがたい極楽浄土の恩恵に浴する機会を捨て置いて、わたしが再びつらい現世に帰るなんてこと、ありませんよ。

【補説】

当歌は、解釈史をたどれば直ちに知れるとおり、上句を、「わざわざ望んでもぬれたいと思う極楽の蓮の露のようなありがたい説経を捨てておいて」〔選書〕、「望んでもかか(こんなありがたい)蓮の露(み仏の恵み)を捨てて」〔全歌集〕、「進んでかかりたいと思う、このようないがたい蓮台の露だというのに、それをさしおいて」〔大系〕といった線で解いてきた。およそ、霧困ニユアンス気を汲んで意をもつて訳せば、そうならざるを得ないのだろう。しかるに、そもそも「かゝる」を「掛かる」と解するとき、それは

下二段活用の、いわゆる自動詞であり、「露がかか(り濡れ)る」のである。断じて「露に濡れかかる」ことはできないのである。

また、「かかる」「露」「置き」「置き」は縁語、「かかる」は「掛かる」と「斯かる」、「おき」は「置き」と「措き」の掛詞、との説明が施されるのが一般だが、正確を期せば、「掛かる」と「置き」が、「露」を中心語として、その縁語である。そして何より、縁語は本来、「二重になっている語の一方は意味にからまない」のであり、「けつして歌の文脈とは交わらない」(渡部泰明『和歌とは何か』岩波新書)のである。

そのような縁語をいわば裏にして、いわゆる表の語たる「斯かる」と「措き」とが、作者・清女の現在へと読む者を導くのである。言い換えれば、作者の置かれている現在に身を寄せるよう、読む者をして誘い込ませるべく機能しているのである。

当歌の解釈は、かく、縁語を正格に扱い得るか否かにかかっているものと考えられ、右の【通釈】はそのことを踏まえてのものである。ただし、もとより試訳である。

【本文】

すわうを人のとりたるをえさせよといへは

21 しらせはや衣のうらにあるよりはなみたの玉の袖にかゝるを

【釈文】

「数珠^{ずず}を、人のとりたるを、得させよ」と言へば、

知らせばや衣の裏にあるよりは涙の玉の袖にかかるを

【語釈】

●すわうを―いま、「わう」を「す」(字母「春」)からの転訛すなわち「春」の草体の上部が「王」へ、下部が「字」へと、それぞれ転じて書写され来たったと推察し、原態と思しき「す」に復してみる。かくて、【釈文】は「すすを」を「数珠^{ずず}を」に作った。

●人のとりたるを―「とる」は「盗る」にも解し得るが、おだやかに、「手にする」の意で捉えておく。●えさせよ―頂戴よ。くださいよ。●しらせはや―「はや」は、願望を表す終助詞「ばや」。ここでは特に詠み手たる清女自身の願いの実現を望む意を表している。知らせたいものだ。伝えたいことよ。なお、「しらせばや」と起こす歌は、清女の時代には無い。結句からここに文脈

が還る倒置構造の詠としては、たとえば「しらせばや新桑繭のかきこもりいぶせきまでにしのぶ心を」(堀河院百首・恋・一一四六／顯仲)など。●衣のうらにあるよりは―「衣のうら」は、法華經卷四五百弟子受記品第八に説く七喩の一つ、「衣裏繫珠(衣珠)」の寓話すなわち、酔いつぶれ眠っている間に友人が衣の裏に宝珠を縫い込んでくれたのも知らず、やがて他国を流浪し艱難し、わずかな収入に満足していた賤夫が、時を経て友人と再会するに及び宝珠のことを聞かされ初めてそれに気づき、ようやく宝珠を得ることができた、との話柄に基づく語句。なお、この寓話における「友人」とは仏、「賤夫」とは仏弟子声聞のことであり、仏性を備えながらそれに気づかず、のちに釈迦の説法を聞くに及んで悟ること、また日常小智を得て満足し、由来最高の智慧を与えられているのに気づかないことの譬喩という。ちなみに、僧都源信の詠に「玉かけし衣のうらをかへしてぞおろかなりける心をは知る」(新古今・卷第二十・釈教歌・一九七二)がある。「よりは」の「より」は、ここでは比較の用法。「は」は強調。衣の裏にある玉よりも、の意。●なみたの玉の―涙という玉。涙を玉に見立てた表現であり、この一首においては、数珠という宝珠・宝玉に対置するものである。なお、『古今和歌集』に「藤衣はつるる糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりける」(卷十六・哀傷・八四二／忠岑)、『拾遺和歌集』に「遠く行く人のためには我が袖の涙の玉も惜しからなくに」(卷六・別・三三八／貫之)。また、『榮花物語』卷二十七「衣の珠」は、枇杷殿皇太后妍子の「かはるらむ衣の色を思ひやる涙や裏の珠に紛へむ」とそれに対する女院彰子の「紛ふらむ衣の珠の乱れつつなほまださめぬ心地のみして」との贈答を伝える。●袖にかゝるを―「袖」は、しばしば涙の落ちる場であり、涙をぬぐう料である。「かゝる」は、むろん、涙が袖に「懸かる」の意だが、「斯かる」の意をも響かせる。他例としては、「今はとてこず系にかかる空蟬のからを見むとは思はざりしを」(後撰・卷十二・恋四・八〇三／平なかきがむすめ)などを挙げ得る。ところで、「かゝるを」の「を」をもって一首の文脈は初句「知らせばや」に還ること、すでに「しらせはや」の項で触れたとおりである。

【通釈】

「数珠を、人が持っているので、ください」と言うので、

- 21 数珠なら衣の裏にあるでしょうが、今はそんな数珠という宝玉よりも、私の袖にこのように懸かっている涙という玉の存在をこそ、あなたには知らせたいものです。

【補説】

さしあたり【通釈】に示したように解したが、詞書の伝える状況はなお不分明である。萩谷『全歌集』は、(一)数珠を、誰かさ

んが手にしているのを、（私が）「頂戴よ」と言ったところ（その人が詠んだ歌）／（2）（私の）数珠を誰かさんが取り上げたのを、（その人が）「（自分に）頂戴よ」というので（私が詠んだ歌）／（3）（私の）数珠を誰かが取り上げたのを、「（私に）返してくださいよ」と（私が）言ったら（その人が詠んだ歌）／（4）数珠を、誰かさんが持っているのを、（別の人が）「頂戴よ」というので（数珠の持ち主の誰かさんが詠んだ歌）／（5）数珠を、誰かさんが持っているのを、（別の人が）「頂戴よ」というので（側

にいた私が詠んだ歌）などと、想定しうるかぎりの場合を列挙してみせたが、ある男と清女との間のストレートなやりとりという線での理解でよいのではないか。何らかの事情あつて数珠という「玉」を所望してきた男に、涙という「玉」をもつて切り返した一首、そう見てよいのではあるまいか。少なくとも第三者を介在させる用はないものと考ええる。

【本文】

おなし人みなつきはかりにはきのをき下葉の

こはみたるを折て

22 これをみよ上はつれなき夏はきの下はかくこそ思ひみたるれ

【釈文】

同じ人に、水無月ばかりに、萩の青き、下葉の

黄きばみたるを折りて、

これを見よ上はつれなき夏萩の下はかくこそ思ひ乱るれ

【語釈】

●おなし人―前歌21で清女に数珠を所望してきたのと同じの男であろう。なお、詞書掉尾の「…折て」を、「…折つて添えて贈つた歌」と解するのが自然であると見られるところから、【釈文】に示すとおり、「同じ人に」と、対象格の「に」を補う。底本は直後

の「みなつき」の「み」の字母に「三」を用いているが、あるいは「二」を字母として「おなし人に」とあった「に」からの連綿が因由となつて、結果的に「に」を誤脱せしめるに至つたものでもあらうか。●みなつきはかりに――言うまでもなく、陰暦では晩夏である。下の「はき」の「下葉」の変容変色をもたらす時期を指し示すとともに、歌中の「夏はき」を導く。●はきのあをき下葉のこはみたるを――「はきの」は、「萩の」。萩で。「の」はいわゆる同格の用法。「萩」は、「白露は上よりおくをいかなれば萩の下葉のまづもみづらむ」（拾遺・卷九・雑下・五 一三／伊衡）のように、その葉を「上」「下」に分けて詠まれることが少なくともなかつた。当歌もその一つである。「あをき」は「あをし」の連体形。「あをし」は、名詞「あを（青）」から生まれた語。「あを」は、白と黒との間の広い範囲の色で、おもに青・緑・藍、ときに灰色などを指した。ここでの「あをし」は、植物のあざやかな緑色の謂いであり、萩の下葉に対する上葉の色の形容である。「こはみたるを」は、萩の生態から推して、その下葉の黄変を指しているよう。そこで萩谷『全歌集』は、「黄金」「木立」の例をもつて「き」「こ」相通を唱え、「黄ばみたるを」に作つたが、やや苦しいか。いま仮に、字母を「支」として「きはみたるを」とあつた「き」が、「支」の草体と「尔」のそれとの類似から「に」に變じ、さらに字母が「二」へと転じて、ついに字母を「己」とする「こ」に誤られたものと推察し、【釈文】では「黄ばみたるを」に定めらる。●折て――萩を折つて文付枝として、次の一首をしたためた文を添えるのである。●これをみよ――この初句を同じうするものに、たとえば「これを見よ人もすさめぬ恋すとて音をなく虫のなれる姿を」（後撰・卷十一・恋三・七九三／源重光）がある。それに寄せておのが恋の空しさや苦しさを歎訴しうる、そういう事物を恋の相手の眼前に突きつけんとする詠み出しである。●上はつれなき――下の「下は：」と呼応並列する。かかる表現構造は直ちに、たとえば「葦根はふ溼は上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を」（拾遺・卷第十四・恋四・八九三／よみ人しらす）の一首を想起させるが、それこそは、外ならぬ『枕草子』が「五月ばかりに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいと青く見えわたりたるに、上はつれなくて草生ひ茂りたるを、長々と縦ざまに行けば、下はえならざりける水の、深くはあらねど、人などの歩むにはしり上がりたる、いとをかし。……」と綴つた際に援用したのであろう一首であつた。●夏はきの――「夏はき」は夏萩。「萩」は秋の七草に列せられるように、概して「秋萩」と詠まれることが多かった。しかるに当歌では「夏萩」である。ちなみに、そもそも古典文芸一般における四季の描写が春と秋とに比重が重いなかで、『枕草子』には夏の記事が極めて多いことが知られる。なお、【補説】を参照されたい。●下はかくこそ――「上」が、萩の上葉にことよせつつ、人間（ここでは清女）の、外界に見せる表情ないし周囲から見られる外貌であるのに対し、「下」は、やはり萩の下葉にこ

とよせつつ、人間の、外には決して見せない心情ないし周囲からは見えない内心を指す。●思ひみたるれ―「思ひ乱る」は、「刈菰の思ひ乱れて我恋ふと妹知るらめや人し告げずは」(古今・巻第十一・恋歌一・四八五/よみ人しらず)、「忘らるる時しなければ葦鶴の思ひ乱れて音をのみぞなく」(同右・五一四/よみ人しらず)のように詠まれた。相手を恋うればこそ苦しく、苦しければ忘れんとして心は乱れ、心乱ればさらに忘れられず恋うる思いは募る、「思ひ乱る」はそうした心的葛藤、恋慕と忘却との螺旋状態^{スパイラル}を内包する一語である。

【通釈】

同じ男に、水無月のころに、萩の青々としたので、下葉の黄ばんだのを折って(添えて贈った歌)、

22 これをご覧なさいな。うわべは端然としている夏萩でも、下葉はこんなに乱れているのですよ。きっとあなたには何でもないように映っている私も、この心の内はあなたゆえにこそ千々に乱れているのですよ。

【補説】

【語釈】の項でも触れたように、間違ひなく『拾遺和歌集』の「葦根はふ……」の一首を知悉していた清女には、「上は……下は」との対偶的表現構造は自家葉籠中のものであったと思しい。そうした接造をしかと構える一首たる当歌をもって、清女は前歌についてまたも男への歎訴に向かったのである。前歌も当歌も清女のものである。清女のものであるべきである。

さて、それにしても「水無月」は、単に事実関係を承けてそこに記述された、というのではあるまい。夏萩が「夏萩」でいられる時季の終わりを迎えて「下葉」が「黄ばみ」ゆく必然的背景を象っているのだと述べておかねばならぬのは当然として、それが指し示す深長たる意味は、「秋」の到来、すなわち男の「飽き」の訪れ近きを寓した点であった。そうした〈空気〉を象っておいて、黄変した「夏萩」の「下葉」を男の変心の喩としてではなく、男の「飽き」の決定的な到来を悲観的に予期して思い乱れ、心弱まってゆく己れの喩として男の眼前に差し出すみずからを清女は描いたのである。

なお、前歌21には、袖の涙に向けて落とされる視線を印象づけて「かかる」の語が存し、当22番歌には、黄変した萩の下葉に向けて落とされる視線をやはり印象づけて「かく」の語があった。その通底するところから結ばれる作者像は一つであり、それは男ではあるまいと述べたとしたら、印象批評に墮するであろうか。

【本文】

女のなにふみともあらていふをみむといへは

おこすとて

23 なとり川かゝるうき瀬をふみかけはあさしふかしもいひもこそすれ

【釈文】

「女の、何文なにぶみともあらて言ふを見む」と言へば、

「おこす」とて、

名取川かかるうき瀬をふみかけば浅し深しも言ひもこそすれ

【語釈】

●女のなにふみともあらていふをみむ―これ全体を男からの要請と見る。前々歌21で数珠を所望してきた男である。よって、「女の」は、女性万般が、女性という存在が、の意である。「なにふみ」は、「何文」と見る。「何」は、「何心」や「何事」、あるいは「何物」や「何者」といった言葉のそれと同じで、どういう、どのような、の意である。「いふ」は、ことばとして表現すること。手紙をしたためること。「みむ」は、「見む」。その場合の「む」は、一般に意志とされるが、つまるところ、願望である。●といへば―と言へば。男が要請してきたので、ということである。●おこすとて―この「おこす」の把握の不全が、詞書全体の理解を晦渋にしてきた因由と思しい。「おこす」とは、他から物を届ける意を受け手の立場で表す語である。「送る」「やる」が与え手の立場から言うのに対するものである。言を換えれば、「おこす」と「やる」とは、今日的にいわゆる視点の位相によるのだ、ということである。その意味で、「来」と「行く」との関係と同断である。ここでの「おこす」は、「来」が時に視点を目的地において、「自分がそちらに」行く」の意で用いられるのと同じで、目的物たる「ふみ」が届くべき男側に視点を置いて、「やる」の意で用いられていたというべきなのである。ちなみに『枕草子』第五三段に、「なに事にもあれ、急ぎてものへ行くべき折に、『まづ、我るべきところへ行く』とて、『ただ今おこせむ』とて、出でぬる車待つほどこそ、いと心もとなけれ」とあるのが参考になろう。なお、角川古語大辞典は、「与え手が対等以下の場合に用いることが多い」と言う。対手の男をさぐる手がかりの一つになるであろうか。ともあれ、「おこすとて」は、清女の反応である。●なとり川―名取川。陸奥国の歌枕。現在の宮城県南部を東西に流れ

る河川。『枕草子』第五九段に「(…)名取川。『いかなる名を取りたるなるらむ』と、聞かまほし」とある。和歌では、「陸奥にありといふなるなとり河無き名取りては苦しかりけり」(古今・卷第十三・恋歌三・六二八／忠岑)や「名とり河瀬々の埋れ木あらはればいかにせむとかあひ見そめけむ」(同右・六五〇／よみ人しらず)のように、「名を取る」という名称から、有名無実の噂が立つとか、有名の評判が立つといった文脈を形成する基点として機能することが多い。当歌においても、下句に収斂することになる歌意の前提的起点・基層を成す。また、後の「かかる」「うき」「瀬」「ふみ(かけ)」「あさし」「ふかし」といった一連の縁語の中心語でもある。●か、るうきせを―「うきせ」は、一般に「憂き瀬」と漢字をあて、つらい身の上やつらい境遇、あるいは苦しい立場、と説かれる。「かけてだに思はざりしをなみだ川か、るうきせ」にあはむ物とは」(『清輔集』三三八)などはいかにもそのとおりだが、「浮き」の意の掛かる場合も多い。たとえば、『蜻蛉日記』上巻は天徳二年七月、兼家との贈答を交わした道綱母の長歌に「(…)涙の川の はやくより かくあさましき うらゆゑに ながるることも 絶えねども (…)

人のうき瀬に ただよひて つらき心は みづの泡の 消えば消えなむと 思へども (…)」と見えるほか、それに似る和歌に「涙川浮きたる泡と身をなして人のうき瀬をながれてを見む」(古今六帖・第四・二〇八七)とも見え、いずれも相手の薄情さをつらく思い泣きながらただようように過ぐす憂き世をかたどり、「川」との縁で、「世」を「瀬」と言いなしたであろうことが知られる。また、『源氏物語』は手習巻の浮舟詠「はかなくて世にふる川のうき瀬にはたづねもゆかじ二本の杉」においては、薫と匂宮との三角関係に翻弄された彼女自身の人生が見据えられている点が注意される。当歌でも、「なにふみとも」つかぬ文に清女が綴った「うき瀬」とは、自身の人生を、つらい、浮薄なものと認識したうえで、それを表象したものであつたのだろうか。●あさしふかしも―「ふみ」を「み」た後の反応として予見される男の所感の、清女による、いわば事前のかたどりである。清女の生の観照を、さて、男は「あさし」と斬るのか、「ふかし」と慈しむのか。●いひもこそすれ―「いひ」は、「ふみ」を讀んでの所感を男が表明するの謂いである。「も」「こそ」「すれ」は、そう重なって、強い不安や懸念の、この場合、清女における厳存をかたどる。世の噂ないし評判へと展じるかもしれないからは、男から評価されることは、それが「あさし」であれ「ふかし」であれ、困る、と清女は観じているのである。なお、「もこそすれ」が和歌に詠まれた例としては、「こよひ来む人にはあはじたなばたの久しきほどに待ちもこそすれ」(古今・卷第四・一八一／素性、『素性集』六は結句「あへもこそすれ」が夙く、他に、「雪まぜてみるべきものか神無月しぐれに袖の濡れもこそすれ」(『伊勢集』二〇二)、「渡りてはあだになるてふ染河の心づくしになりもこそすれ」(後撰・卷第十四・恋六・一〇四七／よみ人しらず)など。

【通釈】

(同じ男が)「女性というものが、どういう手紙ということもなく書いたのを読みたい」と言うので、「届けます」と言つて(詠み添えた歌)、

23 評判の立つことで知られた名取川のつらいばかりの川瀬ならぬ我が生を手紙に書いてお見せして、底が浅いか深いか言われなくても困ります…。

【補説】

当歌は、【語釈】の項でも少しく触れたとおり、詠み手をめぐる議論そのものが浮動的である。右には、卑見としてそれを清女その人とする立場を示した。結果的に、21と23番歌は、清女が男に何らかのものを渡し与えた折に詠み添えた歌たちである、ということになる。21の「知らせばや」、22の「これを見よ」に相当する表現を持たぬ23は、一首全体のトーンも前二首とは異なること否みがたいけれども、なればこそ「おこす」という、受け手である相手に視点を置く語がその意味で適格に配されているのだ、と言えば、我田引水に墮ちるであろうか。

ところで、「何文ともあらで言ふ」、そのような手紙とはどのようなものであろうか。あるいは『和泉式部日記』は「九月廿日あまりばかりの」、「あかつき起きのほどのことどもを、ものに書きつ」けた、かの「手習ひのやう」なものであつたらうか。読んだ者をして「浅し」／「深し」を吐露せしめるもの、と同時に、書いた者をして読まれ批評されることへの不安や危惧ないし羞恥を惹起せしめるものとなれば、自己や他者、此岸や彼岸、その他もろもろの物事への観照を含み持つ文言を散りばめてあることは、まず間違いないであろうけれども。

なお、一首は、表層的には、「評判の立つことで知られた名取川の水のかかる川瀬を渡りかけると、人びとはきつと、浅いか深いか口々に言うことでしょう」といった一連なりの歌意を形成し得るものと考えられ、「かかる」「(うき)瀬」「ふみかけ」のあたりは掛詞と認定し、【通釈】でも表・裏それぞれを示すべきかとの思案もあつたが、右のとおり、主意のみを重んじた。先の20番歌もそうであつたように、説明をしようとするればそれ相応の文言を要する修辭や表現を擁しながら、相手に伝えたいことは端的にこの一点、といった詠み口であることに気づかされる、それが清女の歌であろうと判断したからである。

【本文】

かたらふ人のいもうとのこのすちならましかは

おもはさらましといひたりしに

24 わたの原そのかはあさく成ぬともけに白波やよせぬとをみよ

【釈文】

語らふ人の、「いもうとの、この筋すぢならましかば、

思はさらまし」と言ひたりしに、

わたの原その川浅くなりぬともげに白波や寄せぬとをみよ

【語釈】

●かたらふ人―(↓7・9番歌参照) ●いもうとの―「いもうと」は、「いもひと(妹人)」の変化した語。①兄弟からみた姉妹。

②男性から女性を親しんで呼ぶ語。③妹、といった意を表すが、ここでは「かたらふ人」を主語として据えるからは、②である。

妻もしくは恋人の女性(すなわち清女)を指して、あなた。 ●このすちならましかは―「すち」は、筋。ゆらい、強い繊維の意であり、そこから細長くひと続きに通っているもの、さらに、ひと続きのつながりや関係性のあるもの、の意をも表すようになったが、具体的な語義・釈義は、文脈に応じて区々である。ここでは、性分ないし人となり、あるいは方面ないし嗜好、といった意でひとまずは捉えるべきであろうか。「ましかは」は、「ましかば」。「まし」の未然形「ましか」+接続助詞「ば」で、下の「まし」と呼応して、いわゆる反実仮想の文脈を形成する。もしうだったら…だったらろうに。もしうなら…であろうに。 ●おもはさらまし―「おもは」は、「おもふ」の未然形。「さら」は、打消の助動詞「ず」の未然形「ざら」。なお、「おもふ」は、心中に一つの想念を持ち、長い時間にわたってそれを保ち、大切にしつづける意。(異性を)胸の内むねで慕う。(異性に)好意を持つ。「おもはさらまし」は総じて、大切に思っ心に深くかけることはなかつただろう、の意となる。 ●といひたりしに―「かたらふ人」が言い放った状況は必ずしも判然としないが、「このすち」との表現から推して、彼と清女との間で、「すち」が当面の話題となったことは確かである、と見てよからう。 ●わたの原―これを初句に据える詠は、『古今和歌集』では、かの「わたの原八十島かけてこぎいでぬと人にはつげよ海人のつり舟」(巻第九 羈旅歌・四〇七/小野篁朝臣)のほかは、「わたの原寄せくる浪のしばしばも見まくのほしき玉津島か

も」(巻第十七・雑歌上・九二ノよみ人しらず)の一首があり、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』の両集には皆無、『後拾遺和歌集』に「わたのはら立つ白波のいかなればなごりひさしく見ゆるなるらん」(巻第十六・雑二・九三四ノ右兵衛督朝任)の一首を認める。なお、この『後拾遺和歌集』歌には「風はただ思はぬかたに吹きしかどわたのはら立つ波もなかりき」(同右・九三五ノ赤染衛門)の「かへし」があるが、広い海原、大海原を意味する「わたの原」が「白波」の立つ〈場〉であること、「白波」が「風」によって立つものであるという自然界の摂理に対する認識と理解とが古代人であったことを、両歌は私たちに教えてくれる。と同時に、当歌24を理解するうえでも極めて有益である。なお【補説】を参照されたい。●そのかはあさく成ぬとも―「かは」は川。「その」は、ここでは、事物をはつきりせずに示す用法。なににの。ある。「そのかは」で、ある川が、の意。川という存在が、いうにも等しい。「あさく成」とは、川の水量が少なくなる、流れが弱くなる、の謂いである。●けに白波やよせぬとをみよ―「けに」は、「げに」。いかにも。現実に。「白波」は、言うまでもなく、海に、白く立つ波。なお、のちに【補説】でも改めて述べるけれども、当歌では、立つのは海においてである、というその一点が、何よりも枢要事である。「や」は、間投助詞。韻律を調えつつ意味を強める。「よせ」は「よす」の未然形。「よす」は自動詞で、波が立ち、打ち寄せる、の意。「ぬ」は、打消の助動詞「ず」の連体形。上の「や」の結びではなく、いわゆる余情をこめるための連体形である。と同時に、上の「なりぬ」の「ぬ」と、韻律のうへで響き合う。「…とをみよ」は、…とご覧ください、…とお分かりください、の意。「ちとせへむかたみとをみよしのひつつひとりすたたむつるのけころも」(三元輔集四三)、「よろつよをさきまもりといのりつつたちつくりえのしるしとをみよ」(後拾遺・巻第十九・雑五・一〇三ノ入道前太政大臣)。

【通釈】

親しくしている男が、「あなたが、もしこんな性分だったら、きつと好きになつてなかつたらうなあ」と言ってきたので(詠んだ歌)、

24 海は海。川は、どんなに浅くなつたつて、実際、白波は寄せぬもの。そんなことくらいお分かりください。

【補説】

今さらめくが、海とは、地表面の低地に溜まった、いわば巨大な水たまりである。そしてその水面が風によって揺れ動く現象、それが波である。対して川は、発生する波よりも流れという水の動きが大きく、事実上、波が立ったり寄せたりするとは認識され

ない。要するに、波は、川には立たないものなのである。

当歌は、その事象を借りて、川が海のように波の立つ場にはなれないように、自分の性格など簡単に換えられるものではない、そんなこともお分かりにならないのか、と訴えたのである。もしくは、戯れてみせたのである。

その意味で、そもそもの「かたらふ人」の言も、あるいは仲違いの発生した折からの直言か、あるいはベタ惚れの裏返しとしての戯言かのいずれかであろう。

尤も、注釈史を閲すれば、異本の「語らふ人の、『この道ならずは、いみじく思ひてまし』と言ひたるに」との詞書ならびに「わたの原そのかた浅くなりぬともげにしき波や遅きとも見よ」との歌の形姿自体を梃子に、「恋人の男が、『この道——和歌のやり取りなどという、めんどうなことさえなければ、君をもっともつと愛するのに』と言ったので、詠んだ歌」と詞書を捉え、一首を「あなたへの思いが浅くなり、便りが間遠になってしまっても、それこそあなたのお望み通り、(和歌を)遠慮しているものと、どうぞ、そう思いなさいよ」(「歌人選」と解するに及んでいたことを知る。

しかるに、異本・流布本間に存する、まずは詞書の逆理、ついで一首を形成することばたちの徑庭は、いかにも流布本中の「筋」を異本の「道」と同意・同断に解くことを許さぬものとして横たわっていよう。右の【通釈】は、その点をふまえての試解である。

【本文】

人のもとにはしめてつかはす

25 たよりある風もや吹と松嶋によせて久しき海士のはし舟

【釈文】

人のもとに、初めてつかはす

たよりある風もや吹くとまつ島に寄せて久しき海士のはし舟

【語釈】

●人のもとにはしめてつかはす——「人」は、本集ではこれまでもそうであったように、男を指す。「はしめて」は、初めて。「つかはす」は、贈る、やる、の意。清女の側から、ある男あてに初めて文を送った、というのである。言うまでもなく、当時、恋の初

めの求愛の文は、男から送るのが通例であった。男が送り、そして、待ったのである。いま、それが逆である。異例である。何が
あったのか。清女をしてそこまでさせる相手の男とは、誰であつたらうか。いずれについても審らかにはし得ない。いずれにせよ、
返事を待つことになる立場から、次の一首は詠み出されることになる。●たよりある風もや吹と松嶋に―「たより」は、頼みにで
きるもの、都合のよいもの・こと、の意。よつて、「たよりある風」で、船出・航行に都合のよい風、の謂いとなる。「もや」は、
「…も…か。…だらうか」と、軽い疑問の意を形成する。「松嶋」は、陸奥国の歌枕だが、「松」に、「たよりある風」が「吹」く
かと「待つ」の意が掛かる。さらに、詞書をふまえればその「待つ」は直ちに恋の文脈へと転じ、その場合に「待つ」ことになる
「たよりある風」とは、頼みないし機縁となる音信・消息、である。なお、念のため言い添えれば、音信・消息の意を成すのは「た
より」の語ではなく、「風」である。またさらに、「君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く」（万葉・巻第四・四八
八／額田王）の一首に見るのと同断であると認められるとすれば、その場合の「風」は、男の訪問ないしその予兆、といった意を
形成することになる。男の、よい機縁やあてになる訪れはあるか、と待つのである。●よせて久しき海士のはし舟―「よせて」は、
如上の「風」を待つべく、島の沿岸に「はし舟」を「寄せて」、の謂いである。と同時に、詞書に発する文脈に由来する掛詞を考
慮すれば、心を寄せて、の意をも形成する。その際、元和古活字本『倭名類聚鈔』巻十一に「艇」を「波之布襦」と訓んで「小船
也」と注されていることから、今の「はしけ」に相当するものと思しき「はし舟」もまた、掛詞の文脈に拠れば、清女自身のかた
どりとなる。なお、「はし舟」は、『枕草子』第二八六段に、「うちとくまじきもの。似而非もの。…」船の道。…」はし舟とつ
けて、いみじう小さきに乗りて漕ぎありくつとめてなど、いとあはれなり。「あとの白波」は、まことにこそ、消えもていけ。…」
海はなほ、いとゆゆし、と思ふに、まいて海士の潜かづきししに入るは、憂きわざなり。…」男おとこだにせましかば、さてもありぬべきを、
女はなほ、おぼろけの心ならじ。…」舟の端はたをおさへて放ちたる呼吸いきなどこそ、まことに、ただ見る人だにしほたるに、落し
入れてただよひありく男は、目もあやに、あさましかし。」と見えて、海士の、わけても海女の、寄るべであることともに、海
上生活の不安感のいわば表徴たることが知られる。本歌でも、望ましい風を待つて碇泊するはし舟のうえの海女の形姿・心姿に、
清女のそれらが準えているとも見られよう。ともあれ、下句は総じて、あなたからの好もしい返信があるかと待つて久しい私であ
るよ、といったほどの意とならう。ところで、清女と同時代に「松嶋」「海士」を併せ詠んだ恋歌には、たとえば源重之の、「松島
や雄島の磯にあさりせし海人の袖こそかくはぬれしか」（後拾遺・巻第十四・恋四・八二七。『重之集』では、初・二句「松島の石間の磯

に」がある。

【通釈】

ある男のもとに、初めて送った（歌）、

25 船出をするのに好都合な風が吹くかと松島に寄せてずっと待っている海士の小舟のように、好ましい機縁となるお便りがあなたから届くかと心をよせてずっと待っている、それが今の私です。

【補説】

当歌は、『玉葉和歌集』にも採られ（巻第九・恋歌一・一二五一。詞書は「人のもとにつかはしける」）、比較的知られた一首と言ってよかるうが、詞書を額面どおりに受け取ったものか、どうか。そのままならば、清女の、恋の文脈における生の一齣として極めて興味深いけれども、そのありようは、あるいは兼題であったことを指し示しているか。

ただし、本集における配列という点では、右の【語釈】の項に引いた『枕草子』は第二八六段がいかにも示唆的だが、前歌24に詠み込まれた「白波」からの連想によるものと見てよかるう。

それにしても、清女には、当歌が「人」のもとに届いた時点ですでに時がいかにほどか経過していることが、しかと見えている。だから、見えているその時点を起点にして詠んでいる。よって、内容は、たとえば、今日のいわゆる即レスを望む女心、ということになる。

【本文】

26 のかるれと同じうき世の中なれはいつくもなにか住吉の里

【釈文】

のがるれど同じ憂き世の中なればいづくもなにかすみよしの里

【語釈】

●のかるれと―「逃るれど」。世を逃れたといっても、の意。初句に用いた詠としては、たとえば、「のがるれどうとましくこそおもほゆれこやなに人のみそのなるらむ」（公任集）四二二／源兼澄。●同じうき世の中なれは―「うき世」は、一般に「憂き世」

と漢字を当てる。悲しみや苦しみに満ちたこの世。無常なこの世。また、男女の文脈においては、悩み多い仲。つらく切ない関係。第二・三句を同じうするものに、たとえば、「山里もおなじ憂き世の中なれば所かへてもすみ憂かりけり」(古今六帖・第二・山里)。なお、「のがる」「うき世」を併せ詠んだ歌には、たとえば公任の、「白河の宿にうき世をのがるれどしづめる影はなほぞ見えける」(『公任集』五二四)がある。●「いつくも―」「いつく」は、「何処」。「いづこ」に同じ。「いづ」は不定の意を表し、「く」は場所を示す。「心には厭ひはてつと思ふらんあはれいづくもおなじうき世を」(金葉・卷第十・雑部下・六二九/静厳法師)。●「なにか―」副詞「なに」に係助詞「か」が接続した表現。疑問の文脈では、どうして…か、の意、反語の場合には、どうして…か、いやくない、の意を形成する。当歌の場合は、反語。同じ用法を使ったものに、たとえば、「あしからじよからむとぞ別れけんなにか難波の裏は住みうき」(拾遺・卷第九・五四一)の一首がある。●住吉の里―「住吉」は、摂津国の歌枕。「住みよし」を連想させ、また音も通じるところから、類型歌は極めて多い。たとえば、「すみよしと海人は告ぐとも長居すな人忘れ草生ふといふなり」(古今・卷第十七・雑歌上・九一七/壬生忠岑)、「みやこには住みわびはてて津の国の住吉と聞く里にこそ行け」(拾遺・卷第九・雑下・五三九)など。

【通釈】

26 つらいこの世の現実から逃れてみても、しよせんこの世はこの世ですから、どこも住みよい場所になどなりません……。

【補説】

詞書のない当歌の、その、詞書がないという事実。それこそが、この歌の理解を最も難しくせしめている要因だろう。

さて、そこで、理解への一手として、前歌25の詞書は当歌にまで及んでいいるのだ、と捉えてみることは可能ではあるだろう。すなわち、ある「人」に「はじめて」宛てた、恋の文脈において、たとえば、

ある女との関係を避けてはみても、しよせんは同じ、つらく切ない男女の関係ですから、どこも通うに好都合ということにはなりませんよね。つまりは私のところとて同じこと、あなたが来てくれるはずがありませんね…。

などと解釈してみることはできるだろう。いかにも「はじめて」というべき、初心ゆえの期待を詠んだ一首と、不安ゆえの諦観を詠った一首。しかも、両歌ともそれぞれに「松島」「住吉の里」という歌枕を用いているという連関性と連続相の厳存。もはや右の理解でよいように思われてもこよう。しかれば、両歌枕の土地は、なぜそのようになかけ離れたのか。明解は、おそらく得られ

まい。すなわち、両歌が並び立ついわれや必然性は、実は、見出しにくいのである。

かくて、異本を援用して補助線が引かれることになる。異本には、次のようにある。

つ のくに、あるころうちの御つかひにたゞたかを

よのなかをいとふなにはのはるとてや

のがるれどおなじなにはのかたなればいづれもなにかすみよしのさと

見られるとおり、「のがるれど」歌は、「たゞたか」からの「よのなかをいとふなにはのはるとてや」との詠みかけを承けて詠み出だされたのであった。注釈史は、その「たゞたか」に「忠隆」を当て、「よのなかを」の上句を、主上の御意を体した源忠隆から清女のもの、果たして「のがるれど」の一首をそれに対する清女からの返歌、と把握してきた。その際、読み取りの文脈に定子崩御とのコンテキストを据え、清女詠はいかにも定子喪失の虚無感からの嘆きをうたったものと見られてきたのもあった。いずれも、知られるとおりである。

しかし、本流布本に、忠隆からの上句をもつての詠みかけは、存しない。一方で、清女の一首は、ひとり、けれども厳然として、存している。既に確認したとおり、26番歌の詞書の文脈を当歌にまで及ぼす理路が断たれているとすれば、なおさら、詞書なしに当歌が屹立している形姿とその内実とは、しかるべく定位されねばならぬはずである。

翻って、1～25番歌のすべてに詞書はあった。まず、流布本『清少納言集』とはそういう歌集であったことを確認しておきたい。よって、当歌における、詞書の単純な意味での「欠落」という発想は、放擲すべきであろう。25番歌までと誠実に向き合ってきた読み手は、だからこそ、違和を覚えるはずである。違和とともに26を読んだはずである。詞書は、なぜ記されなかったのか、書き得なかったのだとすれば、その書き得ぬ事由とは、何であったのか、不明へのもどかしさを抱えながら向き合うほかなかったはずである。

さて、そのもどかしさゆえに、もどかしさから抜け出さんがために、もしくは何ほどかの光明を求めて、左の27番歌に眼を転じるその時にこそ、『全歌集』の示唆した「惴り思うところがあつての闕文」という事象への想像は呼び込まれるべきではなかったか、というのが卑見の主筋である。すなわち、定子の崩御という現実を直面して、そこから「のがる」ほかなく逃れた清女にとって、その「現実」を詞書になぞるといふ事態は、まさに惴り避けたかったであろうと想像されてくるのである。言を裏返せば、書

かないこと記さないことよって、読み手をしてそこにあった事実を触知せしめる、そういう方法に身を委ねるほかなかったのだらうと推量されてくるのである。想えば、『枕草子』にしてからが、日記的章段の所々で「沈黙」を見せる作品であった。テクストの「空白」は、読者によって埋め合わせられるのであった。

なお、またぞろ『全歌集』を引き合いに出せば、萩谷のいわゆる「『清少納言集』祖本の編修者を清少納言自身である」とする議論もまた、右に述べたあたりからその可能性を拈げ得るであろうと考えるが、ここではひとまず筆を擱いておくことにする。

ともあれ次には、「しきの御さうしにおはしまし、ころ」と起こされる詞書を有して27番歌が待つ。定子ありし日々のなかのとある一齣の、点綴の始まりである。

【本文】

しきの御さうしにおはしまし、ころこゑの

右京命婦よひの程にまいりて女房たちの

中に

27 と、めをきしたましましゐいかに成ぬらむ心ありとは見えぬ物から

【釈文】

職の御曹司におはしましころ、うへの

右京命婦、宵のほどにまゐりて、女房たちの

中に

とどめおきし魂いかになりぬらむ心ありとは見えぬものから

【語釈】

●しきの御さうしにおはしまし、ころ——「しき」は、職。「職」は、律令制下の役所の名称。「省」に属し、中宮職・春宮職・大膳職・修理職・左京職・右京職などがあつたが、平安時代以降は特に中宮職を指すようになった。中宮職とは、内裏のすぐ東、建春門外に位置して中務省に属し、当初、皇后・皇太后・太皇太后の三宮の事務を扱つたが、のち一条天皇の時代以降、中宮のための

役所となった。「職」はまた、それ一語で「職の御曹司」を指す場合もあった。中宮職の官庁の一室たるその「しきの御さうし」を中宮定子が数度にわたって住居としたことは、「職の御曹司の西面の」と書き起こされる第四六段を始めとして『枕草子』の諸段に点綴されたところによって知られるとおりである。ただ、『枕草子』が「職の御曹司におはしますころ」「職におはしますころ」などと、中宮の住まいを一貫して現在形で表したのに対し、本作が「おはしまし、ころ」と過去の助動詞を用いたところは、いかにも興味深い。なお【補説】を参照されたい。●こゑの右京命婦―「こゑの」は文意不通。あるいは、「うへ」↓「うゑ」↓「こゑ」との転訛を経たか。「うへの」であれば、主上のそば近くに仕える、天皇付きの、の意。「右京命婦」は、『全歌集』が「権記」長保元年七月二日条に見える内裏女房の一人たる「右京」をそれかとするが、不詳。●よひの程にまいりて―「よひ」は、夜にはいつて間もないころ。日没から夜中になる前までのうち、「夕べ」につづく時間帯をいう。なお、「まいりて」については、『枕草子』のたとえば第二〇段（清涼殿の丑寅の隅の）の閉じめに、「…、御前にさぶらふ人々、上の女房こなたゆるされたるなどまゐりて、口々いひ出でなどしたるほどは、まことに、つゆおもふことなく、めでたくぞおほゆる。」とあって、中宮女房と内裏女房との接点のありようの一端が見て取れるほか、第二五一一段（うらやましげなるもの）掉尾には、「上の女房の、御方々いづこもおほつかなからずまゐり通ふ」との一文が見えて、清女の内裏女房への羨望が伺われて興味深い。さらに加うるに、清女の夫橘則光の姑にして内裏女房であった右近内侍がしばしば中宮方に参上したことが、第六・八二・九五・二二一の各段をとおして知られるが、第八二・九五段は、それぞれ「職の御曹司におはしますころ」、「職におはしますころ」に始まる章段である。●女房たちの中に―「女房たち」は、むろん、定子付きの、である。「中に」のあとには、たとえば『全歌集』が施しているように、「詠んでよこした歌」といった意を補うべきが常道かとも思しいが、ここはむしろ、つぎの一首へと直接する、いわゆる歌文融合の体であることに注意を払うべきであろう。と同時に、次の28番歌以下にも繋がる文体の序開きであることもおさえておきたい。●と、めおきし―「と、めおき」は、「と、む」と「おく」との複合語。「とど（留/止む）」の「とど」は「滞る」のそれと同根という。小さな動きはあつても、そこで抑えて大きくは進ませないことが原義。そこから、ひきとめる、おさえる、中止する、あとに残す、といった意味が派生した。よつて、ここでは、とどめておく、残しておく、の意。「わがよはひ君が八千代にとりそへて留めおきせば思ひ出でにせよ」（古今・巻第七・賀歌・三四六／よみ人しらず）。●たましるいかに成ぬらむ―「たましる」の仮名づかいは「たましひ」が正。「たま」は霊の意で、「ひ」も神霊の意か、とされる。「たま（玉）」と同根で、古くは、物に宿って人間を見守り助

ける働きをなす目に見えない存在を指した。いわば精霊であるその「たま（魂）」が人間の体内に宿ると、精神的な活動をつかさどると考えられた。またそれは体内から脱け出して自由に動きまわり他と交渉を持つことのできる遊離霊で、肉体が減びてもこの世にとどまって人を守るとされた。「たま（魂）」と「たましひ（魂）」とは、和歌では後者のほうが用例数も多く、のちに派生して判断力や思慮分別、その人の本質的な心の持ち方、あるいは才覚などの意味をも表すようになった。ここでは、ある大切な思いがこもった精神そのもの、あるいは、本質的なある傾きを持つ心根、といったニュアンスである。たとえば、『古今和歌集』の一首、「飽かざりし袖のなかにや入りにけむわが魂のなき心地する」（第十八・雑歌下・九九二／陸奥）の「魂」は、「女ともだちと物語して、別れて後に、つかはしける」との詞書に徴して、朋友との別れに際し、名残惜しさゆえにそこになお留まりたかった作者陸奥の思いそのものである。果たして「思い」はそこに留まりたればこそ、陸奥が今にかかえる「魂」は「なき心地する」、すなわち空っぽなのである。かくて、当歌における右京命婦もまた、中宮定子を囲む空間への名残惜しさゆえに、「たましひ」を「とゝめお」いたのである。「いかに成ぬらむ」の「ぬ」は完了、「らむ」は眼前にない事柄についてその現在を推量する、いわゆる現在推量の助動詞である。なお、右に引いた陸奥詠が「けむ」、当歌が「らむ」と、過去と現在との違いはあるにせよ、いずれも推量の助動詞を用いていたのは、「魂」なるものが目に見えないがための必然の理であろう。●心ありとはみえぬ物から―「心あり」は、周知のように、かの『天徳四年内裏歌合』（九六〇）以降、歌合の判詞に、深い心がこめられているさま、心のこもった姿、といった意味の評語として用いられた表現である。かりに、ここでそのことを意識する必要がないとする場合でも、「心」が、右京命婦の、中宮方に寄せる思いである一点は動かないであろう。右京命婦は、みずからが、中宮方に親しみや敬愛といった心情を抱く存在であることを表明しているのである。「みえぬ物から」の「物から」は、逆接の接続助詞。ゆらい、「物」は既成の事実を示し、「から」は原因・理由を表す語なので、そもそもは「…であるに決まっているので」の意を形成するはずだが、それを当然の前提として述べる用法が強く働き、「当然だが」というニュアンスで対比的な内容が下接するようになって逆接の意が固定化して用いられるようになった。なお、当歌と同じ「みえぬ物から」で詠いおさめる歌は、「涙にぞ浮きてなかるる水鳥の濡れては人に見えぬものから」（伊勢集・一六五）、「なげきさへ春を知ることわびしけれもゆとは人に見えぬものから」（後撰・巻第二・春中・六五／よみ人しらず）など。いずれも、一首の構造と論理としては、結句から初句へと還る倒置の体である。

【通釈】

中宮様が職の御曹司でお過ごしになっていらしたところ、内裏女房である右京命婦が参上して（帰った後に）、中宮付き女房の中に（詠んでよこした歌）

27 残してまいりました私の魂はどうなっておりますでしょうか。そちらへの深い心が私にあるとはお分かりにはならなかったでしょうけれど……。

【補説】

本歌は清女の歌ではない。それでも、本流布本のなかで本歌ほど不幸な一首はあるまい、と言っておかねばフェアではあるまい。それというのも、歌中の「たましぬ（たましひ）」の語の解釈に始まり、その全体が誤読の歴史をたどってきた一首だからである。たとえば、村井『選書』は、「こんな悲痛な歌」とも「これくらいの哀切な歌」とも言い、「皇后の御父道隆公が、この世にとどめておかれた魂は、いったいどのようなようになってしまったのでしょうか。（…）」と解した。また萩谷『全歌集』は、「（…）」（特に私が）心あるものとは見えはしないのですが（それでも精一ぱい、亡き関白様のご冥福を祈って参ったのです）。との解釈を施し、佐藤『大系』は、「定子の父関白道隆が薨去した後、天皇の御使として職の御曹司に住む定子を訪れた命婦の歌で、道隆の死を悼み、定子に深い弔慰を表す心を詠むか」との注を加えてきた。

いづれも「たましぬ」の把握の取り違えに発する誤解であると言わざるを得ない。たとえば、「たま（魂）」と同根の「たま（玉）」を詠み込んだ「あかずして別るる袖のしらたまを君が形見とつつみてぞゆく」（古今・巻第八・離別歌・四〇〇／よみ人しらず）におけるその「たま」も、また「形見」も、「死別の場合に限らない」（高田祐彦訳注『古今和歌集』角川ソフィア文庫）のであった。

翻って、当歌はいかなる一首か。ヒントは、詞書劈頭にある。「しきの御さうしにおはしまし、ころ」との表現が想起させるのは、『枕草子』のいわゆる「職の御曹司」章段である。何あろう、当該章段こそは、「主題が定子に収束することを前提とする章段でありながらも、定子に関する記述が極端に少ない章段^{〔注〕}」であり、定子賛美の評語としての「めでたし」が見られぬ章段なのであった。そこでは、直叙なき賛美が果たされていたのである。

かくて果たして27番歌は、右京命婦の心内に、そこからの立ち去りがたさを強く惹起せしめたという歌柄をとおして、いわば搦め手から定子サロンの賛美を果たしていたのだ、とは言えまいか。

ただし、【語釈】の項でも触れたとおり、『枕草子』の「職の御曹司」章段が「職の御曹司におはしますころ」「職におはします

ころ」と、中宮の居住を一貫して現在形で表していたのに対し、本歌詞書が「おはしまし、ころ」と過去の助動詞を用いていることには注視の眼を向けおくべきだろう。

それは、『枕草子』が定子ないし定子サロンの「今」「ここ」を描ききることに腐心していたのに対し、当歌は、ありし定子サロンがそこから去るには名残惜しさの募りすぎる空間であったことを指し示し得る明証たる一首をもって、定子ないし定子サロンの絶対を現前せしめんとした編者によって、ここにこうして配置された、そのように読んでおきたい。

〔注〕 田畑千恵子「定子晩年章段の語りと表現——日記的章段のかたち」（『國文學』第41巻1号、一九九六年一月）。

【本文】

いしはしある所にて殿上人どもの物いひける

まへを入道この中将なりのふのもとに

君のわたり給けるを入道この中将なりのふは

きんたちのねすなきてこのいしましに哥

よみかけたまへとせめられければ

28 よるのまにいしはしはかりねてゆかん

【釈文】

石橋ある所にて殿上人どもの物言ひける

前を、入道権の中将成信のともに

君の渡りたまひけるを、入道権の中将成信は、

君達の鼠鳴きて、「このいしばしに歌

詠みかけたまへ」とせめられければ、

夜の間にいしばしばかり寝てゆかん

【語釈】

●いしはし―石橋ないし石階。後者は、たとえば『源氏物語』は「須磨」巻で、源氏の住まいが、訪れた三位中将の眼をとおして描かれるくだりに、「…竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものからめづらかにをかし」などと見えたりするが、ここは、たとえば清涼殿東面は二箇所の三級の階の前にある、南北に流れる御溝水に架けられた、平たい一枚石の橋などを指しているよう。『全歌集』は清涼殿北廊の黒戸の御所のそれとするが、なお未詳。ともあれ、「石橋」と当てておく。なお、ことばとしての「石橋」が恋の通い路の橋ともされることは、のちの考察・理解のために押さえておきたい。●殿上人とも物いひけるまへを―「殿上人」は、四位・五位の官人、および六位の藏人で、清涼殿の殿上之間に昇ることを許された者。あるいは、院や東宮の御所に昇ることを許された者。「物いひ」はハ行四段活用の動詞「物いふ」の連用形。言葉を交わす、おしゃべりをする、の意である。ただし、ここでは、次の29番歌の詞書の文脈から判断するに、殿上人たち同士のおしゃべりではなく、「すだれの中」の女房たちを相手にしてのそれと見るべきか。●入道この中将なりのふのもとに君のわたり給けるを―「この中将なりのふ」は、権の中將成信を比定し得るか。「權中將」「中將成信」とともに『枕草子』に見える。成信は、兵部卿致平親王二男。母左大臣源雅信女。左大臣藤原道長の養子となる（『尊卑分脈』）。長徳四年十月二十二日右近衛權中將。長保三年二月四日出家。本流布本が「入道」を冠しているのは、後に出家したその事実を踏まえての呼称表記と見られよう。さて、その「なりのふのもとに」「君のわたり」なさるといふ文脈、立ち返ってその場面・状況が、いかんとも理解しがたい。「なりのふ」は、この後の文脈において、「殿上人」＝「きんたち」から呼びかけられ、歌の詠出を求められることになるわけで、「殿上人とも」の眼前にいるべき存在だからである。そこで、いま、流布本系諸本の中の一冊たる京都大学図書館蔵本が、ここを「なりのふのもとに」と作っているのに従っておくことにする。「…のとも」は、たとえば、「天地のとも、に久しく言い継げとこの奇し御魂敷かしけらしも」（『万葉集』巻五・八一四／山上憶良）などと用いられたように、「…ととも」に「…といっしよに」の意である。次の「君」がまた、誰を指し示すのか、難解である。当面の試解として、違和感はあるが、『枕草子』に、他ならぬ中宮定子を指して「君」「宮」が共存している事実を鑑み、また、前歌の【補説】の項でも触れたとおり、この前後の詞書が、その文脈形成に与って、定子サロンに係る（場）を内包している事実を徴して、仮に中宮定子と見ておく。「わたり」は、四段動詞「わたる」の連用形。「わたる」は、ある地点からある地点まで移動するのをいう語。文脈や状況によって、行く、来る、通る、いずれかの意になる。●きんたちのねすなきて―「きんたち」

は、君達。表記は「公達」とも。殿上人のうち、名門貴族の子弟を言った。ゆらい「きみたち」の変化形。「たち」は敬意を含んだ複数を表す接尾語だが、「きんだち」は単数・複数のいづれにも用いられた。ここは、文脈的に、前の「殿上人とも」を言い換えたものである。「ねすなき」は、「ねずなく」の連用形と見るほかあるまいが、だとすれば、平安期の、これが孤例か。「ねすなく」は、いわゆる鼠鳴きをすること。「鼠鳴き」は、「愛うつくしきもの」雀の子の、鼠鳴きするに躍り来る。：」（『枕草子』第四百四段）、
「大納言ハ姫君ヲいとあはれと見つつ、鼠鳴きしかけたまへば、物語をいと高くしかけて、高々とうち笑ひうち笑ひしたまふにほひ、（：）」（『夜の寝覚』巻二）など見え、鼠の鳴き声のような声や音を発して小動物を呼んだり、幼児をあやしたりすること。また、人を呼んだり人を呼ぶ合図にしたりもした。ここは、殿上人たちが成信に対して、このあとにする要求のために、先ずは自分たちに注意関心を向けさせるべく発した音であろう。俗に言う舌打ち呼びである。●このいしましに哥よみかけたまへ―殿上人たち―君達の発語と見る。「いしまし」は、字母「満」と「波」との、あるいは「末」と「半」との字形類似によって、「いしはし」から誤写されたか。あるいは「しば（暫）し」の古形が「しまし」であったことが関わるか。いづれにせよ、意改に従うべきであろう。「よみかけ」は、「よみかく」の連用形。「よみかく」は、最も表層的には、対手に向かって歌を作って示す、歌を詠んで対手の注意関心を向けさせる、の意、また、「いしはしに」の「に」は動作の対象を示す用法、と見られようが、事はそう単純ではない。「よみかく」は他に、歌（場合によっては、上句だけ）を詠んで相手に示し、その返歌（場合によっては、下句）を求める、あるいはまた、和歌を、同音を利用して別の意味に解し得るように作る、要するに掛詞を用いて和歌を作る、といった意味を有するのであった。その場合には、「に」は手段を示す用法ということになる。果たして、石橋に詠む、「いしはし」を用いて詠む、あるいは、「いしはし」を掛詞にして詠む、さらには、そうして作ったものを誰か相手に詠みかける、と、意味は一元的ではないのである。ともあれここでは、そもそも発語の意味がそうした重層性を帯びたまま成信に届くことが意図されていた、そのような発語である、と捉えるべきなのだろう。●せめられければ―「せめ」は、マ行下二段活用動詞「せむ」の未然形。「せむ」は、相手に接近し、距離をつめて寄ることが原義で、相手を追いつめる、また武力で攻撃する意、そこから、身にこたえるような苦しみを与える意や相手との距離をつめて行動を強く促す場合にも用いられた。相手との関係や状況の違いによって意味は微妙に異なり、ここでも、催促する・強要する・せきたてる・懇願する、などいずれも当てはまると言えば言えよう。「られ」は、尊敬の助動詞「らる」の連用形。書き手から「君達」への敬意の表れである。●よるのまに―平安期に、「夜の間」を詠み込んだ歌は、管見の限り

では、ない。●いしはしはかり―君達の発語に比べ得たことを前提にすれば、「石橋ばかり」と「寝暫しばかり」との両意を形成してしよう。ただ、「石橋ばかり」は、石橋とだけ、石橋だけと、といった意か、それとも、石橋あたりで、石橋のそばで、といった意か、副助詞「ばかり」のみが「石橋」に接した表現からは、にわかには断じがたい。「寝暫しばかり」の「寝」は、眠ること、眠り、の意である。「暫し」は、少しの間、の意。これに「ばかり」が接して、ほんの仮寝といった程度に、くらしいの意になる。●ねてゆかん―「ね」は、ナ行下二段活用の動詞「ぬ(寝)」の連用形。「ぬ」は、ゆらい、床などに横になる意。転じて、男女が共寝をする、の意や、旅先で休む場所を求め横になって眠る、すなわち旅寝をする、の意にも用いられた。「ん」は、主体の意志を表す助動詞。

【通釈】

石橋のあるところで殿上人たちが(簾の中の女房たちと)おしゃべりしていた前を通って、入道権中将成信様とともに中宮様がおいでになったのだけれど、入道権中将成信様は、殿上人たちが鼠鳴きをして、「この石橋に「いしはし」を掛けた歌を、(簾の中へ)お詠みかけください」と催促なされたものだから、

28 夜の間、ほんの仮寝といった程度でも、石橋のそばで寝てゆこう。

【補説】

詞書に描かれた〈場〉が、なんとも捉えがたい。加えて、【語釈】の項でも触れたが、殿上人たちの「このいしはしに哥よみかけたまへ」との発語が、いかにも解しがたい。多義性があるからである。少なくとも、多義性があると解し得る表現体であると判断されるからである。委細は【語釈】に陳べたのでここでは繰り返さないが、【通釈】では、その有するいわゆる含みを、〈場〉の状況とも併せて、最大限に現前化すべく腐心したつもりである。

なお、それは、次の29番歌が発現する基底としての文脈、言い換えれば、29の下句を付け得る淵源として、清女の耳にも届いていたであろう情報としての文脈の形成をも、その発語が担っていたであろう、と判断してのことでもある。

【本文】

といひかけてた、まつりけるにひさしかり

これはすたれの中を君たちおそしくといひ
ければあなかまたまへとみつねもおほえす
といひつゝ、猶ひさしかりければこの中将
まちやすらひほどにおまへにめしあり
とてとのもりつかさのきたれは

29 草の枕につゆは置とも

といひすて、いりにけるをみな人も中将も
あやしとおもひければこや人につたへかたり
けんはとなむまことにや

【釈文】

と言ひ掛けて、たてまつりけるに、久しかり
ければ、簾の中を、君達、「おそし」「遅し」と言ひ
ければ、「あなかまたまへ」と、「躬恒もおほえず」
と言ひつつ、なほ久しかりければ、権の中将、
待ちやすらふほどに、「御前に召しあり」
とて主殿寮しゅもりつなの来たれば、

草の枕に露は置くとも

と言ひ捨てて入りにけるを、みな人も中将も、
「あやし」と思ひければ、「こや、人に伝へ語り
けむは」となむ。まことにや。

【語釈】

●といひかけて―28番歌を承けて、文脈は直接している。「いひかけ」は下二段活用の動詞「いひかく」の連用形。「いひかく」は、

前歌詞書中の「よみかく」と同様に、多義的である。すなわち、相手に歌などでことばをかける、歌などを途中までつくる、歌などをいわゆる掛詞を用いてつくる、といった意を表す。●た、まつりけるに―重点符「、」は、「て」が誤写されたものと見て、【釈文】では「て」に復した。果たして作られる「たてまつり」は、「たてまつる」の連用形。「たてまつる」は、差し上げる、の意。表現の論理からすれば、催促・要求してきた殿上人に応じたかたちだが、実質的には彼らを経て、簾の中の、中宮付き女房たちに投げかけられることになる。その意味で、「たてまつる」は、女房たちの背後に在る中宮を意識しての表現と言えようか。●ひさしかりければ―「ひさしかり」は、シク活用の形容詞「ひさし」の連用形。「ひさし」は、時間の経過が長いなど感じられるさまを表す。ここでは、成信からの上句に応じた下の作句に時間がかかっていると感じられることをいう。●すたれの中を―「すたれ」は、御簾。中宮女房が控えの間としていた局に係る御簾。その局を、『全歌集』は「黒戸の御所」とするが、なお未詳。「中」は、簾中の意だが、事実上、その局にいる女房たちを指す。「を」は、ここでは対象を示す。∴に。∴に対して。●おそし〜―女房たちからの応答としての句作がなかなか発現しないことを難詰する、殿上人たちの言。いま【釈文】では、場の多声に鑑みて、連続する「おそし」を二つの括弧に分けて表してみたが、「おそし、おそし」が異口同音に発せられたと見ることも、もちろん可能である。●あなかまたまへとみつねもおほえすと―すでに8・20番歌詞書のなかでも見来たったとおり、「∴と、∴と」の同種並立格の構文である。【釈文】に掲げたところによって、殿上人たちの難詰に女房たちが口々に抗弁する多声性のありようが明確となろう。「あなかまたまへ」は、「あなかま」より丁寧な言い方。「あなかま、静まりたまへ」の意。「あなかま」は、感動詞「あな」に、形容詞「かまし（喧し）」の語幹の付いた語。これに敬意を含む「たまへ」が付随して、静かになさい、静まりなさい、の意。「みつねもおほえす」は不詳。「みつね」は、凡河内躬恒のことか。「おほえ」は、下二段動詞「おほゆ」の未然形か。その場合、「おほゆ」は、知覚が働く、判断がつく、思い当たる、といった意か。しばらくは、当意即妙の即吟を得意とした躬恒に係る託言と見て、「（即吟で有名な）躬恒だつて考えがまとまらないわ」と解する『全歌集』に従っておきたい。●まちやすらひほとに―「やすらひ」は、「やすらふ」とあるべき活用語尾が誤認のまま書写され来たったと見て、【釈文】には「やすらふ」に復して掲げた。「やすらふ」は、一時足をとめる、同じ場所にとどまる、の意。「まちやすらふ」で、一つ所で待ちつづける、たたずんで待ちつづける、といった意を成す。●おまへにめしあり―「おまへ」は、神・仏、天皇や貴人の前、の意から、神・仏、天皇や貴人を指す敬称として使われた。ここでは、天皇。「めし」は、動詞「めす（召す）」の連用形からの転成名詞。お呼び出し。●とのもり

つかさとりもりづかさ。「とのもづかさ」とも。主殿司(殿司)もしくは主殿寮のこと。「主殿司/殿司」は、律令制において、後宮十二司のひとつ。また、その職員。後宮の乗り物・清掃・灯火・薪炭などのことに当たった。長官の尚殿とのものかみ以下すべて女性。「主殿寮」は、「とのもれう」「とのもりれう」とも。律令制において宮内省に属し、天皇の乗り物・湯あみ・灯火・薪炭・清掃などのことに当たった役所。また、その職員。ここは、主殿寮の役人。●草の枕につゆは置とも―まず、「置」が今日的な送りがないが、「く」の誤脱などではなく、これで「おく」と訓み得る。さて、「草の枕」は、旅の途中で草を結んで作った枕、旅寝で使う枕をいう。「夜を寒み置く初霜をはらひつつ草の枕にあまたたび寝ぬ」(古今・巻第九・鞠旅・四一六/躬恒)のそれなどは、枕としての実体を示す例と見られなくもないが、そこから旅や旅寝そのものを意味し、旅のわびしさを含意した例も多い。さらにはまた、しばしば「つゆ」の「置く」空間となる。ここでも同断である。翻って、旅寝の「草」の上に置く「つゆ」は、「郭公ねぐらながらの声聞けば草の枕ぞ露けかりける」(拾遺・巻第六・別・三四四/伊勢)、「旅のいは寝やなきとこにも寝られけり草の枕に露は置けども」(拾遺・巻第七・物名・三五六/藤原輔相)、「いづくにも恋はせしかど旅衣草の枕は露けかりけり」(金葉・巻第七・恋部上・三八五/大宰大貳長縁)のほか、時代は下るが「夜もすがら草の枕に置く露はふるさと恋ふる涙なりけり」(金葉・巻第七・恋部上・三八五/大宰大貳長実)などと詠まれ、旅の仮寝ゆえに募るわびしさ・さびしさ、あるいは切なさ・恋しさに流す涙の謂いでもあった。そうした表現とその論理に従えば、「置く」に「起く」が掛かるとしてきた従前の理解は、やはり失当であつたとしてよいだろう。●といひすて、いりにけるを―29番歌を承けてのここでもまた、文脈は直接している。「いひすて」は、下二段動詞「いひすつ」の連用形。「いひすつ」は、その場かぎり、たいした意味もなく口にする、無造作に言い放つ、の意。29番を作句した清女の謙退意識を看取すべきか。「いりにける」は、清女が局の奥へと下がったことをいう。●みな人―すべての人、そこにいる人全員、の意である。ここでは、そこに居合わせた殿上人全員が、ということになる。●あやし―不可思議な物事や合理的な理由や根拠の分からない出来事、あるいは合理性に反する不可解な事柄に対したときの感情をいう。率直に感嘆する気持ちを表す場合、否定的な判断を示す場合、ともにある。また、ことによっては、両者が同時に意識される感情として用いられる場合もある。ここも、時間をかけて苦吟する女房たちのなかで、なぜそこまで優れた下句を付け得たかと、清女の句作を訝しがりながらも称えざるを得ない、そのような殿上人たちの感覚・感情の放たれたものではあるまいか。●こや人につたへかたりけむは―ぜんたい、殿上人たちの発語である。「こや」は、代名詞「こ」に、詠嘆の間投助詞「や」がついたもので、これはまあ、これはもう、これこそ、といった意を表す。

「人」は、事実上、清女の同僚女房ということになる。「つたへかたり」は、「つたふ」と「かたる」とが複合したことば。「つたふ」は、告げ知らせる、の意。「けむ」は、殿上人たちが清女のとつたであろう言動を、「…ただろう」と推量する助動詞。「は」は、…なあ、といった詠嘆の意を表す終助詞。●となむ―いわゆる結びの省略の語法である。後に補い得るのは、…とおっしゃったとか、くらしいの表現であろう。●まことにや―これも、結びの省略された表現である。後には「あらむ」「ありけむ」を補い得よう。清女は、あとから耳にした殿上人たちの思惟や発話を、本当だったのでしょうか、と振り返ったのである。その懐疑の意味や意義については、【補説】を参照されたい。

【通釈】

と掛詞を用いた上句までを詠みかけて、差し上げたのだが、(女房たちが下句をつけて返すのに) 手間取ってしまったため、御簾の中の女房たちに向かって、殿上人たちが、「おそいよ」「遅いぞ」と言い立てたところ、(女房たちは口々に)「静かにしてくださいませ」とか、「あの躬恒だつて(そんなにすぐに) 思いつきはしないわ」とか言いながら、それでもやはり手間取ってしまったせいで、権の中将成信様が待ちくたびれていたその時に、「(中宮様を) 主上の方で呼びです」と言つて主殿寮の役人がやってきたので、

29 草の枕に露が置くように、我が身の上のせつなさに涙が袖を濡らすとしても。

と口にして奥へ下がってしまったのだけれど、殿上人たちも中将様も、「ありえない。(どうしてそんな下句が作れるんだ)」と思つたので、「これはもう、同僚に(斯々云々かくかくしかじかの下句を言い放つて来た)と喧伝して語つたことだろうね」とおっしゃつたんだとか。本当かしら。

【補説】

『枕草子』の回想章段を思わせる当条が、しかも『枕草子』の奈辺にも記し置かれなかった話柄を抱えて、流布本『清少納言集』のここにこうして存することの意味は、きわめて深長であると言つてよいだろう。別言すれば、当条を包摂しているというその一点のみにおいても、異本に対する流布本の意義は絶大であると言つてよいだろう。

当条の意義は、端的に言つて、清女の歌への自負が、秘やかにしてさりげなく、余りにも秘やかにしてさりげなく記された点にある。

29によって成った一首は、いかなる一首なのか。29は、いかなる一首を生成せしめたのか。改めて見つめられたい。成信の28によっていわば負托された、掛詞を用いての一首の屹立ということのみを果たしたのが29なのではない。殿上人たちから迫られ煽られ、いかにも切羽詰まった状況下に置かれた中宮女房たちを救った、起死回生の一撃であった、などというレベルの話に収束するのでも、むろんない。29は、恋歌を生んだのである。石橋を渡る手前にあったであろう別れに対し、今なおわりきれぬ思いを抱え、そうであればこそ女との共寝ならぬ、橋のたもとでの仮寝に甘んじるほかない、そういう男の形象化を、清女の下句はもの見事に果たしていたのだということ、何を措いてもここで確認しておきたいのである。

それほどの下句を放ちながら退下した、その清女の行動も相俟って、殿上人たちはいかにも「あやし」と観じ、あの女はきつと同僚に自慢しただろうな、と顔を見合わせるほかなかったのである。清女はそれを「まことにや」と、懷疑と謙退とをもって記した。得心と自負とを韜晦したのである。

かかる条が、ここ巻軸近くに記された流布本の何たるかは、31までを読み解いたうえで、改めて考えてみるべき課題であろう。なお、「置く」には「起く」がかかるとする理解がかつて行われた。歌意不通のみかは、29は、まるで浮かばれまい。失当とするほかないだろう。

ところで、「みつね」が凡河内躬恒であるとした場合、【語釈】に引いた「夜を寒み置く初霜をはらひつつ草の枕にあまたたび寝ぬ」なる躬恒の一首が気になる。「霜をはら」い、「あまたたび寝」た躬恒詠に対し、当詠は、「露」が「置」くままに「しばし」「寝てゆ」こうとする。すなわち、躬恒の一首は、28 29によって擬かれ引き離される存在であったとは言えまいか。

翻って、もし、29は躬恒詠をずらすことにも成功していたのだと言え、それはもはや穿ちすぎであるとの譏りを免れぬであろうか。

【本文】

みの、五せちいた

させたまひしとしたつの日のゆふさり女

房もわらはもをしなへてあをすりのもの、き

ぬ山あひしてゑかきてあかひもなとをむ
すひかけたれは殿上の人〜などめつらし
かりておみの女房とつけてたちまじりたり
人よりも頭中将ようゐしけさうし給右
京兵部などかたぬきひきつくろひなと
するにあかひものどくれは
30 あしひきの山井の水のこほれるをいかてかひものどくる成らむ
といふいらへはそれやなといひゆつりてとみにも
いはねはさはかりのはかなきことおほくすへ
きにもあらすまたとをくゐたらむ人のさ
しをよひていふへきにもあらねはおもひ
わつらひてかたはらなる弁のをもとに

31 かはこほりあはにむすへるひもなれはかさすひかけにゆはふなるへし

【釈文】

宮の、五節出だ

させたまひし年、辰の日の夕さり、女
房も童もおしなべて青摺あをずりの裳・唐衣、
山藍して絵描きて、赤紐などを結
び掛けたれば、殿上の人びとなどめづらし
がりて、「小忌の女房」とつけて立ちまじりたり。
人よりも藤中将用意し、懸想じたまふ。小
兵衛など唐衣ひきつくろひなど

するに、赤紐の解くれば、

30 あしひきの山のみのみづのこほれるをいかでかひものとするなるらむ

といふ。「いらへは、それや」など言ひゆづりて、とみにも

言はねば、さばかりのはかなきことを臆すべ

きにもあらず、また、遠くるたらん人のさ

しおよびて言ふべきにもあらねば、思ひ

わづらひて、かたはらなる弁のおもとに、

31 うは氷あはにむすべるひもなればかざす日かけにゆるぶなるべし

【語釈】

●みの、—当初「みやの」とあつたその「や」(字母「耶」)が「の」(字母「野」もしくは「能」)に誤られ、連続する「の」の二つめが重点符で表記された結果か。『枕草子』第八十五段の本文などにも照らして、「みやの」に改める。その場合の「みや」とは、言うまでもなく、中宮定子を指す。●五せちいたさせたまひしとし—「五せち」は、五節。五節の舞姫。十一月の中の辰の日の豊明節会で、大歌所が五節の歌を奏し、舞姫が五節の舞を舞う。通常、舞姫は公卿・受領が献上する習いであつたが、このように、中宮や女御などからさし出されることもあつた。「年」は、『枕草子』のいわゆる前田家本の勘物に「正暦四年十一月十二日中宮定子献五節給」と見えるのに従つて、正暦四年(九九三)のことかとされるが、かの「宮にはじめてまゐりたる頃」に始まる第七十六段がその記述・表現内容から「正暦四年冬」に比定されるところとの時間的間隔がやや窮屈になることに鑑み、前田家本の記述を疑い、正暦五年の可能性をも考慮すべきか。●たつの日のゆふさり—五節は十一月の中の丑の日から四日間おこなわれた。丑が舞姫の宿所への参入と天皇による帳台(しこみ)の試(非公式に舞姫をご覧になる)、寅が御前の試(舞の天覧)、卯が童女御覧(童女や下仕の天覧)と新嘗祭、辰が豊明節会で本番の舞が舞われた。●女房もわらはもをしなへて—「女房」は、「かしづき」とも呼ばれる、舞姫に随行する女房。通例は八人。「わらは」は、舞姫に従い、香炉(しとね)と茵(しとね)を持つ童女。各一人。「をしなへて」は、歴史的仮名遣いでは「おしなへて」。すべて一様に、の意。●あをすりのもの、きぬ山あひひしてゑかきて—「あをすり」は青摺。「も」は裳。「の、きぬ」は、「か」(字母「可」)が「の」(字母「乃」)に、「ら」(字母「良」)が重点符(、)に、それぞれ誤られた結果と見て、「か

らきぬ」へと復す。「山あひ」は、仮名遣い「ある」が正。「ある」のうち、輸入された蓼藍に対する在来種が「山藍」で、その葉を搗いて得た青色の染料ないし色、あるいはそれを染料として染めた藍染めをも「山ある」と称した。ここは染料をいう。「して」は、手段・材料を示す格助詞。「ゑ」は絵。「かきて」は、「描きて」。白絹に山藍で文様を摺り出した青摺の斎服を着て神事に奉仕する小忌の君達の、そのいわゆる小忌衣おみころもをかたどった服装を舞姫に着せる趣向を、女房や童女たちのそれにまで押し広げるのである。ただし、ここでは、小忌衣の草木鳥文様が板木で捺染されたものであったのに対して、女房や童女の裳・唐衣は描き染めにしたというのである。なお、童女の服装は汗衫かざみが通例であつたらしい。●あかひもなどをむすひかけたれは―「あかひも」は、小忌衣の右肩（舞人は左肩）に斎服たることの印として付ける赤い色の紐。「むすひかけ」は、下二段動詞「結び掛く」の連用形。結んで掛ける、結んで付け下げる、の意。「むすひかけたれは」で、結んで下げているので。ちなみに、『枕草子』は、「むすびさげて」に作る。●殿上の人―なとめつらしかりて―「なと」は、主な例をあげて示す、いわゆる例示の働きをする副助詞「など」。殿上人としばしば並立する上達部が直ちに想起される。果たして『枕草子』は、「殿上人・上達部、おどろき興じて」と表現している。「めつらしかり」は、形容詞「めづらし」に接尾語「がる」が付いて一語化した動詞「めづらしがる」の連用形。「めづらし」はふつう動詞「愛づ」に「らし」の加わった語とされるが、別に、「め」は目、「つら」は連れ立つ意の「連る」の活用形で、まれにしか見ないから見ることを続けたいの意に展開したか、とする説もある。めつたになくてすばらしい。目新しい感じがする。「めづらしがりて」で、目新しさに興がって。小忌衣の意匠が女房や童女の服装にまで及ぶ趣向に、殿上人たちは新奇な興趣を覚えたのである。●おみの女房とつけてたちましりたり―「おみ」の仮名遣いは「をみ」が正。「をいみ」の変化形。「小忌」ないし「小斎」の漢字を当てる。小忌の君達の着る斎服の意匠を擬く服装の女房たちを目の当たりにして、殿上人たちは思わず、「小忌の君達」ならぬ「小忌の女房」と渾名するに及んだというのである。「たちましり」は、「立ち交じり」。殿上人たちは、女房や童女の中に入り交じっているのである。●人よりも頭中将ようみしけさうし給―「頭」は、「藤」からの転訛。「藤中将」は、「さねかたの中将」として10番歌に既出の藤原実方。正暦二年（九九二）九月右中将、同五年九月左中将。ここでは、小忌の君達の一人としてそこにいたものと読めよう。「ようぬ」は「ようい」の仮名遣いが正。いったい「用意」の漢字を当て、文字どおり、意を用いる、気をつける、の意。また、心を寄せる、情意を向ける、のニュアンス。「けさうし」は、サ変動詞「懸想けざうず」の連用形。「懸想ず」は、思いをかけること、恋いしたうこと。また、いかにも思いありげな行動に出ること、思わせぶりな行動をとること。●右

京兵部などかたぬきひきつくるひなとするに―「右京兵部」は不明。あるいは、「右」は「古」を経ての「小」からの転訛、「京」は「右」に引きずられての衍、「部」は、「衛」が仮名「ゑ」と見られて「へ」と転訛し、そこからさらに漢字へと転じたものか。果たして生じる「小兵衛」は、『枕草子』にそれとして見える。中宮付き女房の一人である。「かたぬき」は、原姿「からきぬ」か。すなわち、「ら」（字母「良」）が「た」（字母「多」）に誤られ、ために「きぬ」から「ぬき」への転倒が派生したか。「ひきつくるひ」は、（身なりなどを）きちんと整える意の動詞「ひきつくるふ」の連用形からの転成名詞。●あかひものつくれば―「とくれ」は、結び目などがほどける意の下二段活用の自動詞「解く」の已然形。●あしひきの山井の水のこほれるをいかてかひものどくる成らむ―「あしひきの」は枕詞。ここでは「山」に掛かる。「山井の水」には、「山藍の御図」が掛かる。「図」は絵。「こほれる」は、「氷れる」と「溢れる」の両意を担う。その場合の「溢る」は、衣服の色・艶などが外に表れ出る、の意。「にはほふばかりの桜襲の綾、文はこぼれぬばかりして…」（『蜻蛉日記・下巻』。「いかでか」は、ここは疑問の用法で、どうして…か、どのようにして…か、の意。「ひも」は、「氷面」と「紐」との掛詞。「とくる」は、「溶くる」と「解くる」とが掛かる。「成らむ」は、断定の助動詞「なり」の連体形に推量の助動詞「らむ」が付いたかたち。…であるだろう。…であるのだろう。●いらへはそれやないひゆつりて―「いひゆつり」は、「言ひ譲る」の連用形。「言ひ譲る」は、お互いに言葉弄して返歌の責めを回避すること。その意味で、「いらへはそれや」は、返歌はあなたかしら、返歌はあなたよ、いずれのニュアンスにも解し得よう。●とみにもいはねは―「とみ」は、急に、の意の漢語「頓」が「とに」と音変化し、さらに「とみ」へと変化した語。「とみに」の形で、多く下に打消の語を伴って、すぐには（…ない）、の意を形成する。すぐには返歌しないので。●さはかりのはかなきことおほくすへきにもあらず―「さはかりの」は、それくらい。その程度の。「はかなきこと」は、ちよつとしたこと。たわいもないこと。しばしば和歌のやりとりをすること、もしくは和歌を詠むという営みそのものをも指す。『（…）あだあだしくもまだ聞こえたまはぬを、はかなきことをも』と思ひて、（…）（『和泉式部日記』。「おほくすへきにもあらず」は、このまま「多くすへきにもあらず」と読め、多詠を慎むべきとする認識がここに示されているのだとすれば、それはそれで極めて興味深い。ただここは、前後に仮名遣いの乱れやそれに伴う文意不通を生じた箇所が多く存することに鑑み、「をおくすへきにもあらず」が原姿であったと見ておく。「を」が「お」に、「お」が「ほ」に誤られた、それが結果的に「おほく」という、偶々意の通る文字列を生んだに過ぎないという判断である。果たして結ばれるのは、「さばかりのはかなきことを臆すべきにもあらず」との表現である。最後の「ず」は連用形。いわゆる中止法

である。●また―あるいはまた。また一方で。●とをくゐたらむ人のさしをよひていふへきにもあらねは―仮名遣い、「とをく」は「とほく」、「さしをよひて」は「さしおよひて」だろう。「ゐたらむ人」の「む」は婉曲の助動詞。「さし」は動詞の上について意味を強めたり語調を整えたりする接頭語。「およぶ」は、広がって、ある地点に達する、のびて、ある点にゆきつく、の意。よって、「さしおよぶ」は、こんにち俗に言う、しゃしゃり出る、の意だろう。●おもひわつらひて―思ひ煩ひて。あれこれ思い悩んで、の意。気後れすべきではないという思いと、控えめにすべきだという思いとの狭間で、判断が鈍るのである。●かたはらなる弁のをもとに―「かたはら」は、傍ら。そば。「なる」は存在を表す助動詞「なり」の連体形。「をもと」は、仮名遣い「おもと」。「弁のおもと」は女房の呼び名だが、人物については不明。ただし、状況的に見て、中宮付き女房の中では下臈であろう。「弁のおもとに」の後には、さしあたって詠みかけておいた(歌)、との文脈が続こう。「藤中将」に直接的積極的に詠み出だし伝えることは避け、弁のおもとに中継ぎさせる道を択りつつも、中将詠に返歌できぬ場の状況を打開する、もしくは同詠に一矢報いる、そのことから手を引くことはしなかつたし、できなかつたのである。●かはこほりあはにむすへるひもなれはかさすひかけにゆはふるなるへし―「かはこほり」の「か」は、「う」が誤写されたか。「うはこほり」で、水面に張った氷。「あはに」は、淡に。ここでは、「氷が」うすく」と「紐を」ゆるく」の両義を担う。「むすへる」の「むすへ」は、四段動詞「むすぶ」の已然形。「る」は完了の助動詞「り」の連体形。「むすぶ」には「氷が」できる」と「紐を」結ぶ」の両義が掛かる。「ひも」は、30番歌のそれをそのまま承ける。「かさすひかけ」は、「射す日影」と「頭挿す日蔭(の蔓)」とが掛かる。なお、日蔭の蔓は、新嘗祭などの神事に際し冠の笄の左右に結んで垂らす組糸。もと植物の日蔭蔓を実際に用いたことに由来する名称。「ゆはふる」の「は」(字母「波」)は「る」(字母「流」)が誤写されたか。「ゆるふ」で、「弛ふ」「緩ふ」。やわらかくなる、ゆるむ、などの意。

【通釈】

中宮様がその御もとから、五節の舞姫をお出しあそばされた年、節会の当日の辰の日の夕方、女房も童女もみな青摺の裳・唐衣に、山藍で絵を描いて、赤紐などを結んで付け下げているので、殿上人や上達部といった殿上の人びとなどはその目新しさに興を募らせて、彼女たちを「(小忌の君達ならぬ)小忌の女房」と名付けて、そこに入り交じっている。中で他の誰よりも藤中将実方様はその気になって、彼女たちに思いありげにふるまっていらっしやる。さて、小兵衛などが唐衣をととのえたりなどしていると、紐がほどけた、と見るや、

30 山の湧き水が氷っているのに、どうして氷面ひもが溶けるのでしょうか——唐衣は山藍で描かれた文様がその美しさ溢れんばかりにととのっているのに、どうして紐が解けるのでしょうか。さては、私にうち解けて、みずから下紐をお解きになったのでは。

と詠んでよこす。こちらでは、「返歌は、あなたよ」などと押し付け合いをして、すぐには詠み出さないもので、これくらいの返歌に気後れすべきではなく、そうかといって、離れたところにいた人間が差し出がましく詠むべきでもないこととて、いかにもあれこれ考えあぐねたうえで、そばにいた弁のおもとに（言づけた歌）、

31 表氷うわこおりはうすく氷った氷面ですから、射した日の光で溶けただけのことでしょう——唐衣の赤紐はやんわりと結んだ紐ですから、日蔭の蔓を頭挿すに際して解けてしまっただけのことでしょう。あなた様にうち解けてなどということは、とうていあり得ません。

【補説】

流布本『清少納言集』は、右のとおりに、28・29番歌と同断に、周囲の引き受けきれぬ場の回収に向けて放たれた清女詠をもつて閉じられている。『枕草子』第八十五段が、「うは氷……」詠の後を、「（……）（実方ガ）え聞きつけずなりぬるこそ、なかなか恥隠るる心地して、よかりしか」と引き受けていることとの径庭を味わうべきであろう。言を換えて具体を期せば、彼女の秘やかな自負は、本集において、より滲んでいると言えよう。

〈詠う〉という営みが、実は彼女の生の折々節々に、私たちが想い描いている以上にあつて、しかもそれがその生を支えるに十分であつたらう可能性を予感させるかたち、換言すればその後の彼女の生に向けていわば開かれるかたちで、流布本『清少納言集』は閉じられているのだと言えよう。

おわりに

右をもつて、流布本『清少納言集』への施注作業そのものは終わる。いま、その総体とその構造とを、各歌の詞書のありようと主意とに基づいて概括的にふり返っておくとするならば、次のように示すことができようか。なお、数字は歌番号を示すが、そのうち□で囲んだのが清女詠と判断したものである。

- 1 (浮薄な男へ)
 2 (男からの「返し」)
 3 (「聞くことある人」の恨み言に向けて)
 4 (「同じ人」へ)
 5 …おこせたる
 6 …おこせたまへりし
 7 (「人」へ)
 8 (人)へ
 9 (「かたらふ人」へ)
 10 《実方詠》
 11 (実方詠への「返し」)
 12 (維摩会に行く「人」へ)
 13 (鞍馬に詣でて帰って男へ)
 14 (住吉に詣でる男へ)
 15 (言い置きをして出ていき帰ってきた、「呉竹」を文付枝にした男へ)
 16 (「桂」を文付枝にした男から)
 17 (「桂」を文付枝にした男への「返し」)
 18 …とあるに (則長へ)
 19 …とあるに (実方もしくは或る男へ)
 20 …とあるに (或る男へ)
 21 …と言へば (或る男へ)
 22 (21と「同じ人」へ)
- } 前提歌アリ
 } 男からの物言いに応ず

23 と言へば（或る男へ）

24 …と言ひたりしに（「かたらふ人」へ）

25 人のもとに初めてつかはす

* 「白波」
* 「海士のはし舟」

26 【詞書なき一首】

27 《命婦詠》

28 《権中将成信》からの上句》

29 （応答の下句）

30 《「藤中将」実方からの一首》

31 「いらへ」としての一首）

見られるとおり、浮薄な男へと言い放った一首を皮切りに、その返歌をはさんで、「聞くことある人」からの恨み言に応じた3・4番歌と、男と女の文脈を形成しながら開扉するのが本集であった。以下、その文脈は、7～9番歌、11～15番、19～24番歌にも確認し得るのだが、さらにその中に、12～14番歌詞書における地名の連続、18～20番歌詞書における「…とあるに」表現の連続を認め、また別の視点に立てば、15番歌から16・17番歌への、文付枝に係る「呉竹」から「桂」への連想、24番歌から25番歌への、海に係る「白波」から「海士のはし舟」への連想といったあたりも指摘し得よう。

あるいは、また別の細部に眼を転じれば、6・7番歌は、ともにその詠出の前提となった歌詠を有し、8・9番歌は、男からの抗言に応じたものであるという点において共通する。

さらには、掉尾五首の組成のありようから推しても、果たして本集には〈構造〉が意識されている、と見てよいのではあるまいか。いま、稿者には、かつて萩谷朴が、『枕草子』は三巻本の本文に敷衍するとして辿ってみせた「連想の糸筋」を、本流布本『清少納言集』においても見出し得るであろうとの見通しがあるが、ここで詳述するに足る十全の材料を、未だ持ち合わせていない。

また、前々号は1番歌に係る補注の末尾に述べた、本流布本『清少納言集』の総体の何たるかに係る「見極め」についても、未だ定め得てはいない。すなわちそれは、30・31の贈答歌の有するであろう意義をなお掘りあげ得てはいない、ということである。

いづれも他日を期すほかはなく、いかにも忸怩たる思いをかかえるばかりであるけれども、今はひとまず、これまた前々号の冒頭は「はじめに」に言明した、「解釈という基礎的な、あまりに基礎的な作業のもつ意義」の存否を問うたところで擱筆とする次第である。